



176号

# 変わる 変える 変わった!

●自分を変えた女たち

●子どもたちの“事件”から——

- ・お母さん 私死にたい事件
- ・お母さん 自由服着ていくけえ 事件
- ・お母さん ボク学校に行きたくない事件

今月の発信〈あこら鳥取〉



## 目次

へあごら鳥取 七年——そして私 前田享子 1

### 自分を変えた女たち

服を作れば自分も変わる 伊田幸子さん 2

子どもの“不登校”で変わった——その父もその母も 坂出節子さん 11

フェミニニストだから専業主婦がおもしろい 前田享子さん 17

### 子どもたちの“事件”から

「お母さん 私死にたい」事件 芦谷美鈴 29

「お母さん 自由服着ていくけえ」事件 無替悦子 46

「お母さん ボク学校に行きたくない」事件 日出嶋香代子さん 48

### 鳥取で想うこと

只今フェミニニスト休戦中 小倉耀子 51

AGORAへ愛をこめてエールを送る 小谷省吾 54

久里浜より発信 山本真澄 56

へあごらとわたし 芦谷美鈴 58

日本の外から見たへあごら 服部淳子 61

・めじゃーなりすとのめ 近藤亜矢子 63

・あごら読書室 64

・集会から 70

## 〈あごら鳥取〉7年——そして私

前田享子

出産を機に故郷、鳥取に帰ったのが九年前。その二年後、人と場所を求めて探し回る。母、  
だけでなく、女（ひと）の顔、ひとのことで語り合える相手が無性にほしかった。

そんな折、〈鳥取本の会〉で出会ったのが芦谷美鈴さん。日曜の午前中、表戸を閉め、女たち  
だけで、子連れで、何でもしゃべりあえる会を開いている喫茶店を知る。

その頃の私は、どこへ行くにも、食品添加物の絵本、『消費者リポート』『婦民』『We』そ  
して『あごら』を携えていた。その会のメンバーの一人、Tさんが『あごら』を気に入り、〈あ  
ごら鳥取〉の旗揚げを執拗に迫る。

組織嫌い（不信）だった私は、何かの会を名乗るつもりはさらさらなかった。なぜ『あごら』  
などを三種の神器（五種かな？）のように携行していたかといえば、それぞれの志が私と軌を一  
にしていたし、何より、どれも財政難の出版物ばかりだったので、一人でも購読者になってほし  
かったからだ。Tさんの迫力に動かされて、とうとう旗揚げした。

以来二年間、月一回の例会を開き続けたが、第二子、第三子の出産、そして美鈴さんの選挙等  
などで、今は美鈴さんが中心に。私は目下、女よりも母の顔が幅をきかしているが、母  
か親とかいうよりも大人、昔は子どもだったひととのつながりを大切にしている。

第一子は女の子。「女だから」「女のくせに」は決して使わなかった私たち夫婦だが、周囲は  
なかなかそうではない。そう、「女だから」は、私の中に私憤としてあった。それを公憤として  
心にストンと落としてくれたのは、〈We〉であり、〈あごら〉だった。第三子出産後、例会は  
私は小休止だが、「心は〈あごら〉」の私――。



## 服を作れば自分も変わる

——デザイナー・伊田幸子さん

高校の時、講演で京都から鳥取入りした藤川延子先生に直談判し、住み込みで弟子入りして藤川服飾学院を卒業。  
二十歳から二十二年間カルチャーセンターの服飾講師をなさっています。

(♣ききて 芦谷美鈴)

♣すいぶん親しくさせて頂いているのに仕事の話  
を伺ったことがあまりないので、『月刊あこら』  
を鳥取が担当させていたこの機会に、女ばかり  
相手の仕事をなさっている伊田さんをお訪ねし  
ました。仕事を通して感じられた女の生き方と、  
地域運動を通しての女の生き方の違いみたいなも  
のがありましたら、その辺りのお話をせひ。

◆子どもの頃から、母が縫い物で生計を立ててい  
たこともあって、自分はデザイナーになるんだと

決めていた。家が母子家庭で高校も無理をして行  
かせてもらい、勉強はしたかったがこれ以上家族  
に無理は言えないとわかっていたので、働きなが  
ら勉強するしかないと肝に銘じていた。それで高  
三の時、鳥取で藤川延子先生の講演があつて講演  
を聞きに行った時、講演を全部聞き終わらないう  
ちに、直観で「この人しかない」と思い、終わる  
とすぐに先生を追っかけた。追っかけて行つて、  
「先生、私の話を聞いてください」と、事情を話

した。後日、先生からお返事が来て、住み込みで家事を手伝うかわりに学校に行かせてもらう話が実現した。

♣あの頃の田舎の子どもがデザイナーになる夢を持つというのは珍しいと思うのですが、お母さんの影響ですか？

◆そうですね。今から思えば、たぶんそうだったと思う。とにかく小さい頃から、中原淳一のファッション雑誌なんか家が家にあったし、私の着ているも

のは、全部母が縫ってくれていたし。そばでそれを見ていた。

仕事は、学校を卒業してすぐ姫路のカルチャーセンター・よみうりアカデミーに服飾の講師として派遣された。布を選んでデザインをしてパターンをおこしてちゃんと全部自分で縫うということをおこして、姫路で服飾を教えながら五、六年目に、これからの時代、服飾だけでは駄目だと思ってフラワーデザインの勉強をして免許を取



った。人と同じことをやってたって、これからの時代には魅力がないと思ったの。私自身も自分の生き方として魅力がないし、つきあってくれる相手にとっても魅力がないだろうと思ったの。

◆それはたとえ、よく話す「学校の教師が時代性がなくてライブ感覚がない」っていうのがあるのだけど、そういうのでは、これからの時代、需要と供給が成り立たないと思ったわけですか？

◆そう。その時代はそう思い、今、四十過ぎて、またこれだけではこれからのニーズに応えられないと思って、カラーアナリストの勉強を始めたの。

◆カラーアナリストっちゅうもんは、どげなもんですか？ 教えて下さい。

◆一口で言えば、色の分析をする人ということになるのだけど、自分に似合うものをどういうふうに探していくかの手助けをすることが出来る。私は仕事を選んでいく時、これが金儲けに繋がるかっていうことはいつも考えないの。たまたまそれが結果として繋がってきたラッキーな部分は持つ

てる。私の本来の職業はやはり服飾で、それに付随してフラワーデザインやカラーアナリストがくっついてる。服飾の仕事が膨らんでいって相手に渡せるという、おもしろさ。カラーアナリストというのは、人を分析してその人のベストカラーを見つける。たとえば、その人の肌の色、目のもよう、髪の毛の色、内面に潜んでいるもの、などなど……。その人の持つシーズンカラーと布のカラーを、どうコーディネートしたら、その人がよりステキでいられるかって……。まだ未熟で説明がうまくできないよ。

◆カラーアナリストの勉強をしたいと思ったのは、自分の仕事に幅を持たせてくたなのか、自分の興味か、どちらが強いですか？

◆どっちとも言えないね。自分自身を知りたいためだったら、アナリストに私自身を分析してもらったらすむことなの。私が求めたのはそんな形のものではなく、自分が膨らんで人に渡せるものがあるというのも魅力なんだけど、もっと単純に、

私はそういうことを知りたい、勉強する機会があれば、知識として得ておきたい、そんな気持ち。それに興味がわいて、仕事に幅も持たせられる私の今の立場は、自分が学習したことを人に伝えやすいから。

楽しめる人でないと服は縫えない？

◆教室にみえる女性たちを見て、感じてきたことは？

◆服を自分で作って着るという喜びや楽しみを得たい人というのは、布を自分で選んで、イメージを膨らませて、型紙を作って、一針一針自分で縫ってというような過程を楽しめる人、それまでのながい時間というものを耐えて、仕上げた喜びというものを得たい、そういう生き方のできる人でないと服は縫えない。遊びながらも自分の求めるものを追求していく人が多い。五十、六十、七十になっても自分の可能性に挑戦できる趣味と実

益の世界。今までミシンを踏んだこともない人が、その歳になって初めて挑戦して、ちゃんとしたものを仕上げて、人前に着て出て、評価を受ける。その喜びを感じて自信を持って、病みつきになって十何年もやってる人も多い。

◆実は私も一時縫い物と編み物に凝っていた時期が五年くらいあったの。とにかく寝る間も惜しんで、ひたすらやってた。その時私は基礎も何も習わないですべて自己流だったのだけれど、この布とこの布を組み合わせたら、「え？」というようなものができたりして、専門家のあなたから見たらずいぶんルール違反の作品だったと思うけれど、自己発見の連続だった気がする。

◆そうね。若くはない年になってから自分の意外性というものと出会えて喜んでいらっしやる姿、生き生きしてる女の人たちの姿を見ると楽しい。

◆服作りとその人の生き方が関係あるなっていうことは、私にもわかる。

◆服を作りだしてから変わっていくということは

ある。私は、相手に対して歳に関係なく「かわいい」という言葉をよく使うけれど、いつの間にかその言葉が相手にもインプットされていて、たとえば、七十幾つかの人たちが、「あんたちよっとそれ、かわいいわ」なんて言い合ったりする姿を見ていて、「ああ、やっぱり入っているのは、かわりの中でこんなふうに解放されて、変わっていくんだ」って思うことがある。しかし、女が女らしい服を、女っぽく仕上げることを手助けしてゐる部分があるわけで、そういうこととへあごらの女の生き方を問うということがどう繋げられるのか、切り離さなきゃならないことなのかなあと、自分の生き方と自分の仕事の仕方と何だかすごい歪みがあるような気がする時もある。

♣でも、服飾はその人らしさ、本当のその人って何なのかみたいところと深い関係があるんじゃないかって、カラーアナリストの話なんか聞いていると思うのだけど…。

◆生き方と職業とを無理してくっつけなくなっちゃ

いいかな、なあんで。私の仕事は、自分のポリシーがあつてそれをピシッと服に出せるデザイナーとは違うから。私の仕事は相手があつて、相手の意志がちゃんとあつて、その意志を手助けするという仕事なんだからね、相手を尊重するということは大前提だから。「こういう服が作りたい」と言われたら、そういう服作りの助言をしていく。でももし、それがその人に似合わないところがあると思った時、「私はこういうふうなもののほうがいいと思います」という提案はする。「後は自分で判断してください」と。

♣その人がどうしたかを、一番大事にする？  
エレガントでありたいと言ったら、エレガントになる指導をするわけ？

◆そう。ぜったい強制ということはない。美鈴さんがやっている式と同じだねえ。へらくだへはへらくだという塾の学習システムでしょ？でも、きつとほかに「らくだ式」は転がってるよ。その人がどうありたいかというのが大前提にあつ



て、それが実現するためのプログラムを教える側として持っていたということ。選んでいくのは相手。へらくだゝみたい記録表がなくても、うちは作品が残る。日々、デモンストレーションができる。

♣記録表のいらない「らくだ式」か。だから、先生であるあなたが評価しなくていいわけだ。

◆そう。自己満足という評価が残る。

生きるのに恥ずかしい仕事を

◆美鈴さんと私は仕事の話はしないものねえ。

日頃みんなで集まった時、美鈴さんや真澄さんの仕事は人権問題に直接関係があるじゃない。だけど私の持っている知識やエネルギーはその会話の中に入れない。生き方と自分の仕事のギャップが大きくて、恥ずかしくて出せないわっていう時期も確かにあった。

♣へあごろゝを始めた頃、私たちも女らしさみた

いなものが作られた歴史を模索していた頃、「女の女らしさを手助けする仕事」に対して批判的なものがこちらにあって、それがあなたに言わせなかったのだろうし……本当は女の生き方を一番見ているはずのあなたの仕事を私たちは聞けなかったんだと思う。未熟だったんですね。

◆延子先生に「私を育てて一人前にしてくれ。その代わり、地域に帰って必ずそれを地域に返すから」と約束しちゃってる。

自分の生き方とならべて仕事の仕方は恥ずかしくない。でも、時々、いいものを追求していくとお金がかかるものがあって、そういう時はこれでいいのかな？　ここまでする必要はあるのかな？　って思うことがある。言ってることと、してることが違っはいないかな？　って。

♣自分をチェックする、自己点検する力の大切さ。あるいはそれを辛辣に言ってくれる人をどれだけ持ってるかだと思う。戦争への道と同じだと思うの。何かに夢中になって集中しちゃうと自分が見

えなくなつて……フト我に戻るのには本当に難しい。いつしか間違つちゃう……なんてことよくある。自分でもこわいなあつてよく思う。手厳しいこと言ってくれる友人にほとほと落ち込まれることもあるけれど、これでこそつき合つてよかったと思えるよね。

### 地域の仲間と出会つて変わった

♣とこゝろで出会ひから十年たつんだけど、出会ひのきっかけは私が生協の理事をして、役員さんを探していたんだよね。たまたま交通安全の会長を互いにして、そこで出会つて、この地域の生協の副運営委員長をお願いして、毎週生協の役員会のような日々。そして「文化革命」と言われた「わらび座公演」をやったんだ（行政が反対して潰そうとしたのをやってしまった）。私のこの地での名乗りだった。

地域運動の仲間たちとのかかわりの中での変わ

り方みたいなものない？

◆そりゃ大きくある。本当に白と黒ほど変わった。要素はあったのかもしれないけれど、はっきりしたのは、みんなとの出会ひだと思う。私はいっぺんに変わった。「私の生き方はこっちだったんだわ」とはっきりと感じた。本当にいい出会ひができた。

私、ラッキーな人なの。今にして思えば、父をなくしたこと、ラッキーさ。「父よ、あなたがいなくなつてくれてありがとう」という気持ち。自分の力で生きなさいけないということを教えてくれた。父がいなくなつたいきさつは男と女のドロドロしたものだったけれど、ずうーっとそれを批判してきたけれど、私も人を愛する愛し方が、三十代後半でやっと男と女の機微というものをわかった。家庭があつても誰かを愛する気持ちはどうすることもできないと知った。今の世の中の倫理みたいものから外れても愛したいという気持ちがあるということがわかった。自分の生き方が変

わったというのは、自分の仕事をしながらも自分の生き方と違う方向で仕事をしないほうに軌道修正ができるようになった。仲間との出会いで、ずうーっと自分らしく仕事ができるようになった。

おかしいと思ったことは言わなきゃいけない、言える環境の中に入り込めた。言って間違いないかったという仲間がいる。今生きてる心地よさは、なんとなく生きてきた人と違って、生きたいように生きてきた、したい仕事に恵まれて、言いたいことが言えて……いつ死のうと悔いがないと言えば、無責任っぽいけれど……。でも生きていることが楽って感じ。

この用瀬（もちがせ）という地域があまり心地よくない地域であるということが、地域に生きなきゃならないものとして、幸いかなってところもある。〈へわらび座〉を反対していただいて、本当によかった。少数派の心地よさってものを感じてる。あちら側にならなくてよかった。間違えさせてくれなくてありがとって言いたい。出会いの時、

「この人と出会って私はきっとラッキーなんだ」「私に何かを与えてくれる」という思いがいつも働く。

いま生きている心地よさ

♣ イベントをやる中で自分が変わったものとか、見えてきたものなんかない？

◆ とにかく自分が学びたいからイベントはしていきたい。「見たい・知りたい」から…。

♣ あのね、見たいものは街に行ってみればいいでしょ？ だのになぜこの地でみんなとするのかなあって、私は私が不思議なの。しかも私は〈M S ネットワーク〉って個人的なものをつくっちゃったでしょう？ 前のイベントで黒字になっても実行委員会が違うから、次のイベントの飛行機の切符代に立て替えることさえできない。それに、シングルになったので、少しは経済観念ができて、経費などちゃんと取らなきゃ駄目と思ったこと。

へMSネットワークでやれば、テーマに関心がない人は参加しなくて当然でしょ。ところがみんなやってると、「みんなやってるのに…」という、やらない人に対する恨みがまじさがどっかにある。それは金にもならないのに、いいことやってるという思いがこっちにあるからだと思う。自分がしたいからすることに徹するふっきり。

◆この地でこんなに叩かれながらここまできて、今あなたをそう決断させてる思いを知りたい。自分でやりたいことをやってれば、熱い思いの人は一緒にやってくれるという自信が持てたのか…。

♣「なかま」みたいなやり方は自分が傷つく。余分な期待はしない状況に自分をおかないと「あの人に聞かせてあげたい」なあとおせっかいが働く。

◆よくわかる。私はたけしに対する思いがそう。私がつれあいであるたけしに私流の期待を勝手に持ってきた。あの人がもしかしら持っていないものにまで、あるがごとくに振る舞って欲しいと

いう期待。そんな私が間違っていて、私が勝手に相手も自分も苦しめていたんじゃないかと……ね。それは、みんなとの関わりの中で見えてきた。それを取っ払った後はとても楽になったし、「長い間ごめんなさい」という気持ちに変わって、彼はどう思っているかわからないけど、三人いる子どもたちに対しても同じようなことが言える。相手をいたわれる。彼の自由を奪わなくなった。強制しなくなった。

いま私は四十二歳。けっこう心地よく生きている。

\* \* \*

♣結局、イベントに取り組む姿勢も、夫婦のあり方も一緒かなあなんて……。いつしか、インタビューするほうが、されるほうになっちゃって……変なの。

## 子どもの“不登校”で変わった・その父もその母も

——坂出節子さん

坂出さんは、一年前、子どもさんの不登校がきっかけで、へあこらへに参加なさった。その時の坂出さんは、問題を話せる場ができて、いろいろな視野の人たちと話し、聞く中で、「学校に行く」ということはどうでもいいんだという気持ちで充電していた状況だった。そして、学校へ行かないことの不安が、へあこらへに参加することで解決していったのだと思う。こだわる必要がないとわかったことで、彼女はもう大丈夫かと思っていたが、ニュースクール講座への参加の過程の中で、根はもっと深かったことがわかった。最初は子どもさんの不登校は、学校側に問題があると感じていたようだが、彼ではなく、子どもとのかかわり方や自分たち親側の問題だということに、全体の講座の頃からわかってきたのではないかと思う。その後、へじゃが芋の会を作ったり、Msネットワークの講座に参加したりする彼女を私たちはずっと見てきた。

(畑上公子・芦谷美鈴)

坂出 全体の竹居先生に「片ひじ張って生きているから子どもがゼンソクになる」と言われた時、なるほどと思った。

二十年近く、私たち夫婦の間は、すんなりと何事もなくおだやかに生活してきたけど、それは表面的で、もめごとを起こさないほうがいい夫婦なんだと思って、それを演じてきたと思う。だけど、

本心はそうではないと思いつつ、二人ともそれが言えなかったのですね。

美鈴 おりこうさんだったんだな。

坂出 そう、先に頭で考えてしまう。

美鈴 問題がたくさんあるほうがすてきという価値観を教えられていないから、問題がないことのほうがすてきだと錯覚してしまう。

坂出 周りから仲のよい夫婦だと言われる。それに合わそう合わそうと無理をしてくているのを感じる。でも、ただ、それだけではなく、ドロドロしたものを出していかなくては本物ではないと思う。

美鈴 不登校の中から見えてくるもので、親はもうかった。

坂出 ずっと何かあると思っていたけど、それがわかったということが大きな収穫だった。そして、そのことを彼（夫）に初めて言えた。今までわからないから言葉にすることができなかったけれど、今、子どもが感じていることは、私も一緒なんだと言えた。たぶん彼もそういう風に感じてると思う。

でも、本当はそうやってごまかすのはよくないよね。そういうことを話していくと、彼のほうも気がついたみたいで、整体のことを言い出した時に、自分も行くと言い出して近くに通っている。

頭ばかり使っていると、体のほうがおかしくな

る。体は正直だから、腰が痛いということに表れたということを納得したみたい。

美鈴 体が悪くなつてよかった。気づきのチャンスだね！

坂出 あほらしいとか言つて、今までこういうことと見向きもなかったのに。でも、素直に受け止めてくれた。どうして頭だけで考え、自分の体で感じることを大事にしないのかと思う。

美鈴 体で感じることで食べれない。生活があるからね。高度経済成長のなせるワザだったのだろう。

坂出 彼は犠牲者だったのではないかな。今まで昇進も早く、人に頭を下げて頼むとか、指示されるとか、謝るとかの経験がすごく少ないと思う。

美鈴 私もそうだったと思う。できる子というのは、周囲から期待され、応えることを要求される。期待され続けた子どもたちは、それで人生のり切れると思ってしまう。たとえば、講演とか司会をして、自分では一番よくわかるから、その出来具

合が七〇%だと自分では思っている、他人から一二〇%だと言われると気持ちがいい。たとえ意に反したことをしても、人にほめられると気持ちがいい。だから、ほめられることが好きで、また悲しさがよくわかる。自分の問題点を指摘されることがどんなに気持ちのよいことか、「らくだ」で初めて知った。

できないあるがままの自分を認めていくことは、どんなに楽でどんなにすてきで、それを言ってくれる人がどんなに宝物かということがわかった。坂出 彼の場合は、幼稚園からずっと優等生だったから、失敗することはほとんどなかったと思う。できる子は他との比較を問題にするようになる。みんなの思いにそわないといけないと思うから自然にそうなる。

美鈴 それに、間違いを認めることは難しいと、つくづく思う。

坂出 そういうことこそ早く気づいてほしい。役人というのは、人との関わりが多い仕事だから、

自分の意志に反しても、機構の中ではそれに合わせていかなきゃならないので、テクニクばかり上手になってしまう。だから夫婦の関係も、気持ちよりもテクニクが優先するところがあり、そういうところでは、よそよそしいものを感じる。女性の場合、子育てをする中で、本当の部分がいっぱい見えるけど、男の人はそういう機会が少ないと思う。

美鈴 でも、いいチャンスだよ。腰を痛めたことで、子どもの問題を自分の問題と受け止めることができた。

坂出 彼にとって今が転機だと思う。今より後戻りしない、もっともっと気づいてほしい。

美鈴 不登校のお母さんたちの話を聞いていて、これは夫婦の問題なんだと、そこまでは皆見えている。そこで共通して感じるのは、夫の生き方に対して、妻の価値観のほうに絶対で、自分たちのほうが早く気づきが始まっているのに、夫は気づかないということに不満を持っているように思う。

相手は別の人格なのだから、どう生きようと気楽に見てたらいいのにと思う。不満を持つとストレスがたまるだけなのに。

夫婦の間で、されたらイヤなことから、気持ちのよくないことは伝えたらいいと思うけど、相手がどう生きたいかは相手の問題なんだから、どうしてほしいと要求するのは侵略だと思う。他人の人生なのにおせっかいだと思う。要は相手と私が一緒にいたいかどうかだけだと思う。

畑上 相手にこうなっただけだと思っても、そのとおりにならないから腹がたつ。だけど言葉では言えない。でも思っていて言わないでいることは相手にも通じているから、相手も自分は抑圧してゐる気はないのに、そうされてると感じてゐるらしい。こういうのは絶対うまくいかない。問題が起きるのは当然。

坂出 でも、楽しく一緒にいたいと思う。楽しく感じられないのが問題なので、不快感があるんだったら一緒にいる必要ないと思う。

美鈴 皆の話を聞いてみると、こういう男性像を望んでいるみたい。「仕事は適度にし、女の活動に理解があつて、台所仕事も軽く引き受け、浮気はせず、土日には家庭サービス。仕事以外に会話のできる知的空間を持っている。そして私の話には特に耳を傾けてくれる。」

坂出 そういう男の人って、今、全然いないから。美鈴 じゃ、女たちは、ない男性像を求めているわけ？

畑上 私の場合、理想像はいろいろあるけど、一つ一番すてきと思える部分があれば、後のところはまあいいと思う。その人の人間としての心の持ち方とか接し方。自分の我をとおさないこと。

美鈴 つまり相手を尊重したり、違いを認めたり、横暴でないということだね。それは、相手を認めている人だということだと思う。なぜ女たちは、そういう男の人をすてきと思うのに、自分は相手をおろそかに認めないでこうなっただけだと思つてゐるんだろう。男に問題があるのではなく、女に問



題があるんじゃないかと思う。話にならない次元の低い時代遅れの男たちは別として――。

坂出 男性は、どういう女性を理想としているのかな。たとえば、美鈴さんのまわりの男友達はどう？ 美鈴さんのどこに魅力を感じてるかしら。

美鈴 奔放性にバイタリティ、わがまま、くすぐったりとか……私、一番みつともない自分をみせている。さらけ出していると思う。他の人たちと基本的に違うと思うのは、毎回、この人と付き合っていていいのかとか、一生付き合う約束はないし、明日でも終わりになるかもしれないとかの緊張感がある分、生き生きしていると思う。だからといって、よりすてきな自分でいようとは全然思わなくて、さらに自分をさらけ出そうと思う。結婚生活ではいい子ぶってたからね。元・夫も理解者だったし。

坂出 私もそうかもしれない。ドロドロした部分をさらけ出さない。秘密をいっぱい持つてると思う。理解者……こたわ、本当に。今、やっとお

互いを見せ始めたのだと思う。

美鈴 見せたほうが楽だと思う。

坂出 見せないで理解者……こをし続けるのは、とてもしんどい。それが全部肩肘はることにって、子どものほうに影響して思う。お互い、思いっきり言い合えるカッパルがうらやましい。夫婦としても、親子としても、それがわが家にはない。

わからない部分が多いから、何だか怖い。どこからとりついたらいいのかわからない。一度ぶつかって大げんかしたらいいと思う。

美鈴 お父さんは椎名誠の『岳物語』の世界を卒業していないんだ。

坂出 子どもは椎名誠にすこくあこがれているのよ。

美鈴 子どもたちの座談会を開こう。親に話すより他人のほうがずっと話しやすいと思う。

ところでへすくーるくだんの平井さんの通信によると、いま学校がおもしろくなってきてると

いう。今まで四十人学級という無理なワクの中でできることは何かと精一杯努力してきた教師たちが、それは無理なんだとあきらめて、もうできないという視点に立った時、学校がおもしろくなってきた。

何を試みても全て中途半端にしかできない、無駄な努力だと気づいた教師たちがいるということ、これはおもしろいと言う。

人というのは、強制したり、侵略したりすることが多いと思う。だから常に身近にチェック機関を置くことがとても大事だと思う。「あなたの発言って侵略じゃないの？」というふうに。

坂出 私の彼はソツがなくて、非の打ちどころないという面があるので、周りの人が何も言えない雰囲気をもって思う。何でもスマートにできすぎるから、かわいくないと思う時がある。それを言えるのは私しかないと思う。いま、気づいて本当によかったと思う。退職してからでは遅すぎるもの。

美鈴 ある人が、私の通信作りを強烈に批判した。塾で食べていく気だったら、もっと力を入れて、その入れ方次第で塾は広がっていくと思う。その努力もせず、美鈴教のように自分が何かすれば人がワッと集まってくると勘違いしてたのではないか。そして何かを作るには備品も必要。投資もしなければならぬ等々……どれもみな当たりだった。涙が出るほどうれしかった。

\* \* \*

その人の力の入れ方で、その人の人生は決まってくると思う。さらにまた、人は自分の避けてきたものには、必ずまた出会うようになっていくと思う。

次に私たちの前に起こることって何なのだろう。楽しみだね。こんなふうに思えるようになったのは、いろいろあるけどへらくだゝとの出会いが大きかったと思う。これから、どんなに変わるか楽しみにしよう。でも、変わらない自由も認めよう。



## フェミニストだから専業主婦がおもしろい

——前田享子さん

〈あこら鳥取〉の言い出しっべの前田享子が、子育てを理由に〈あこら〉を休会して数か月……。専業主婦に専念している享子を訪ねてみた。

(伊田幸子、芦谷美鈴)

美鈴 専業主婦して何年？

享子 五年かな……。

美鈴 その前のことまず話して。

享子 東京で三年勤めて、四年自分で塾をして……。

美鈴 シングルだったの？

享子 別居結婚。籍を入れてから子どもを産んだ。

後半から今の夫と同居。家事労働は両方が嫌いで、ほとんど外食でフラフラ出歩いていて。その後、

私は出産で帰ってきた。

美鈴 子どもが二歳くらいになって、〈本の会〉

に来て、出会っちゃったあ……ってわけで「〈あこら〉をしよう」ってことになった。

享子 定期的には四年くらいやったかな？

清吉 清流（第二子）が生まれるまでやった。

美鈴 そして美鈴の選挙。それまでは真面目にやっていたんだ。

清吉 うん。

享子 清儀（第三子）が生まれてから〈あこら〉を再開。

美鈴 それで闘う女の代名詞が家庭の主婦になっ

て何をしてるのかと興味深く来させて頂きました。

怒ったっていけんわ

享子 朝四時半くらいに起きて……。朝御飯がおいしい。昔は「なんで私は食べたくないのに私が作らんといけん、私はコーヒーでいいだけ」と言っていたのに、今は自分がおいしいから……。そんなんですよ。

美鈴 主婦になって朝御飯がおいしい。もっとなんか言ってくれ……。そうかフェミニストは夜遅くまで起きてて朝御飯が食いたくないから、男のために作らない。主婦はしなくっちゃあ、おれない、自分が腹が減るから……。

伊田 フェミニストはやめたの？

享子 廃業かあよお、どうしようなあ……私、フェミニスト宣言もしたことないし、人間ってトータルでしょ。バランス感覚ってあるでしょ？ 肩で風切ってる場合はバランス感覚が悪いんだと思う。

美鈴 肩で風切るフェミニストもいるが、「人間らしい」ということがフェミニストっていうことだと私は思うよ。あるがままに生きるっていうか、自然の理にそった……地球が人間を選ぶ時代が来たのだから、地球に切り捨ててもらわない生き方っていうか……。享子に聞きたいのは、昔、あなたの生き方は活動家のイメージがあった。男と会った途端にケンカしてたし、（おもしろかったなあ）、それが、突然子育て宣言をして……。

享子 子どもを振り回さないって。

美鈴 そのことで生活はあまりにも変わったんじゃないかと察するわけよ、その辺の変化は？

清吉 長女が生まれて、子どもは一人でいいと。

ところが次がたまたま男であったと。あれが女の子であったらどうなったかわからない。わからんけど、長女の育て方と清流の育て方は違った。

美鈴 余裕？

清吉 男が好きなんでしょ、やっぱり……。男好き、単なる。

美鈴 やっぱり一生の中で、しなかったことは元を取るようにできてるんじゃないの？

伊田 おもしろい？

享子 おもしろいっっちゃうより、今一番子どもに欠けているのは素敵な大人じゃないの？って思う。会う人会う人、みんなが子どもの悪口言ってるの。自分はすぐできてるみたいに…。「朝起きれん」「テレビを見る」だとか…。私、信念がないし、子どもに叱られながら「ごめんな」って言いながら日々暮らしているから、あんまり子どもに言うことなくて、「人にされたらイヤなこととはすまいか」ぐらいしか言うわん。「よく謝って威厳がないわねえ」と近所の人に言われるくらいだから。

でも、私いみんなも本当はそうじゃあないような気がする、似たようなもんだと思うだがなあ…。腹が立って怒った後で、「しまった、怒鳴り過ぎた」なんて思ったりしている。「ごめんな」って言うか言わないかは分かれるところだと思うんだ

けど、なんで大人ってみんな自分ではできてるみたいに振る舞うんだろう……。そんなことが、日々多くなって……。

〈清吉さん、ここでみんなにコーヒーを入れ「苦い」と言われる〉

違いはやはり、清さんが時間が取れなくなった。夜、帰らない。夕食の時間もあてにできない。人間ってそういうふうになると、前は「ギャ！」って怒っていたのが、「怒ったっていいけんわ」ってなる。えらいもんだ……。諦めって言うか、なんて言うか……。爆発の度合いも昔より減った。

清吉 減った、減った。

享子 だけど、「経済的基盤がそちらで、養って貰ってるから」って気はないよ。隣のYさんちなんかは全然違う、身体を悪くして「人生働くだけじゃない」と決めて、ゆったりと暮らしてる。私は仕事が好きだったから、養うためにいやいや仕事をしては欲しくない。Yさんは、「仕事が好かん」って言うから、そういう連れ合いといると、

おもしろくないだろうなあと思う。でも夫婦でい

られる時間がとても多いから「いいなあ」って思うんよ。その差を日々突きつけられるけど、「いいなあ、ああいうのは」とは思えないの。それは何なのだろう？

美鈴 愛なんじゃないの？ 清さんが仕事が好きなのがわかるから？ どんどん仕事に行っちゃうだいとは思えないけど……。

私死ぬほど忙しかったでしょ、それがこの前の連休にフツとヒマになって、そしたらヒマですることがない。子どもたちに「塾しようお」ってぐずって、「人には仕事するな、するな、って言うっておきながら、何なんだこれは」って……。仕事してるほうがおもしろい。へらくだ式」になってから、子どもとの関係が楽になったの。

享子 何かしてやろうって思わなくていいからね。（豆むきが始まる）豆の上手な茹で方知ってる？ 上手な人がおるでえ。

## 豆に失礼でない生き方

享子 「享子さん、豆くらい上手に茹でたら」って言われる。豆に対して失礼でない茹で方があるなら教えてもらいたいもんだと思って、教えてもらった。茹でて、冷水を入れて、自然にさます……。美鈴 そうか、それが専業主婦で得たもの……。ええなあ。

享子 「茹でれたらいいが」って思っていたけど……むいたらすぐ茹でたほうがいいのよ。

美鈴 うちい、豆御飯好かんけえ何して食べたらおいしいか知りたい。

享子 カレーに入れたり、何でも入れる。

美鈴 うちい。これを持って帰る。これ頂戴。

享子 清さんの両親は農家だから、冷蔵庫の大きなのを持っていて、一年中買わなくてもいいように茹でておく。でもその仕方が下手。臭いが移ったりしておいしくなくなる。だけどそれはよう言わないから、自分は少なくともそうならないよう

に保存しようとするだけ……。はい、豆をお食べ。

美鈴 どうやって食べる？

享子 このまま食べる。私、豆が好きな人間だから……。

美鈴 だから、丸くなったんちゃう？

享子 失礼だなあ、ハハハ。

美鈴 食べ物のインタビュールになってしまったな。

伊田 主婦をしてる人に会いに来たんだから、食べ物のお話になるのは当然よ。

享子 豆をむかなきゃ言わないわよ。誰？豆むきだしたのは……。でも、レパトリーは相変わらず増えないよ、つくづく苦手よ。

美鈴 上手になったかと思った。

享子 メモしたら、じゅんぐりに回ってるかもしれない。カレーにひじきを入れたり、何でも入れる。「お母さんのカレーはおいしくない、普通のカレーが食べたい」って子どもに言われる。

美鈴 食べ物でも出会いが大事よ。

享子 ハッハッハ、おいしいでなあ。私はとって

もおいしいで。でも子どもは給食とかホレ、当たり前ものをよばれたりするから…：なかなか難しい。今、出ることは保護者としての顔だけ…。

美鈴 豆むいてる時に「あ、私だわ」って思う？

享子 何も考えん。「あ、こういうことを知っていると知らないで、人生って豊かさが違うかなあ」って思ってる。食は一生ついてまわる。服なんか縫えるにこしたことはないが、もらいもんでも生きていける。でも、食は仲良くしてても毎日とはええない。ごちそうは作れなくていいから、基本的な知識は欲しい。やはりマクドナルドに行っても、食べて…：なんかより豊かだと思う。今、じゃがいも、ミニトマト…：なんか作ってる。外のことをずーっとしていると、中に入ってご飯のことなんかしたくなる。中で誰かが台所をしてくれて、外は外でやれたりしたら楽なんだろうなあと思う。

美鈴 分業のほうが楽だと。トータルな見方なんかができなくなるかも知れないけれど…。

享子 ミニトマトは、主軸を一本にして、切った

分を植えとけば、新しい苗をわざわざ六十五円出して買わなくてもいいって知ってた？ 毎朝、起きたら見に行く。「元氣だなあ、元氣だなあ」って声かけて。やっぱし、言葉かけすると元氣になるんだって……発見。草を取るのも自分がうるさいと感じたら取って、クローバーなんかは置いておきたくて取らない。「ああ私って、こうなふうに生きてきたんだ、いいんかなあ」って思う。本当は全部生きものなのになあ……。

美鈴 自然農法の川口由一さんを八月にシンポジウム（他に中澤弘幸氏、平井雷太氏）で呼ぶの。話を聞いてスライドを見せてもらったのだけど、作物が負ける時だけ抜いて、そこに寝かしてあげるんだって……、なきがらは土地の栄養となって、また次の命を育てるために役立つ、命は返る……。

優しくなったのはトシかなア

伊田 出かけられなくて、むずむずしないの？

享子 ない、全く。

美鈴 好きなようにさせとくもんだなあ、ちゃんと一生のうちでこうしてバランス取るようにできてる。

享子 うん。だけ、わからんよ。もうすぐ……子どもはどんどんいなくなるから……。鳥取の人ってよく働く、旦那の給料だけじゃやれないからって。

伊田 でも本を読むことだけは全然やめてないな。享子 子どもに刺激されるのが大きい。「お母さん、あの本借りててまだ読んでない？」「お母さん、この本おもしろいぞ」って言われる。私はよく子どもについて遊ぶ、よそは子どもだけを出す。

うちの子はよくザリガニ取りに行くのだけど、今日は『アフリカのたいこ』を読んで、「やはり命だから、飼いきれにしないでああ、死ぬ前に戻してあげよう」って伝えたくて、「命ってこんなんだなあ……」って話したら「それがどうした？」って。ある人から「自然破壊だ」って言われた。

一番下の子どもはおもちゃにしたいわけよ、すぐ



見つけて団子虫やてんとう虫を掴んで帰る。水を入れたりすると、死んじゃうよ……」「そんなんされたら、悲しいと思う」ってギャーギャー怒った。それからしなくなった。ただでさえ虫が少ないのに、と、この子らは評判よくない。清さんに言つと「いいわいや、小さい時はするもんだし」って言うし、どう思う？

美鈴 小さい子どもが潰してるから虫が減ってると思うかぁ？ そんな体験をさせないから、大人になって人を殺す。命の大切さが、命の加減がわからないから……訓練だと思う。トカゲをみじん切りにしたりして、育つのよ。

伊田 今日、松枯れ空中散布の実験のメダカをもらいに出了でしょ？ 下の子が「なぜ、そんなことをするの？」って言うのよ。返す言葉がないのよ。「でもね、こうして実験して害があると知ってもらわないとわからない大人の人たちがいるのよ」って。でも「ほかの人にしてもらって。お母さんがそんなことをするのを見たくない」って……。

美鈴 空散でザリガニがたくさん死んでるって。  
伊田 柿や梨の生産者がたくさんいて、真っ白くなるほどかけてるから、松枯れの空散なんか、へとも思わないわよ。

美鈴 主婦業になって、男に対する見方は変わった？

享子 男と出会ってない……。

美鈴 清さんには変わった？

享子 清さんの暮らし方が変わった、完全専業主婦依存型。私が倒れたら、回らないと思う。食事がおいしくて健康ときてるし……。

美鈴 享子が清吉さんに対して変わったか？

てことよ。あなたは前から彼に優しかったけど、表現方法が……許容範囲が広くなったのかしら？

享子 諦めと歳と……。

美鈴 歳？ 何の関係がある？

享子 身体をいたわるっていうのか、今私一人になると悲しい、寂しい。今この人がポックリいったらなんて思うだけで涙が出るくらいに……。冗談

でも「いい、死んだらローン払わなくていいし」なんて言えない。冗談でよく言う人もあるけど……  
美鈴 そんなん言えないよ、問題外じゃないの？  
……歳がなにに？ 体力がなにに？ もう一回教えて。

享子 前は、日曜日になんか清さん早く起きて、子どもと遊んでたけど、今は午前中寝かせてあげられる。昔は「日曜日に十時や十一時まで寝なくちゃいけないような働き方っておかしい」と思っていたから、ギャーギャー言っただけで起こしていた。  
美鈴 それ歳？ 自分がしんどくなったから？  
死んで欲しくないから？

享子 うん。

美鈴 それだったら、整体理論からいくと、情眠は命を縮めるって、三時間でいいんだって。

享子 え？ ハッハッハ。じゃあ、明日から……

美鈴 深い眠りを持てるようにしないと……深くないから、長時間寝るのよ。

清吉 子どもと寝てたら、目が覚めて深く寝れない

い、享子さんは寝てるけど、僕は目が覚める。

享子 私い、ちっとも目が覚めん。母は子どもが泣くと目が覚めるものだと言われた。

美鈴 あんたあ、広島の平和行進に行った時、子どもが泣いてるのにグーグー寝てたもんなあ、清さんが起きて見てたけど……母性は産んだ途端にできると思ってる人が世の中にはいるから……。  
享子 歳かなア？ それが……。私、四人目が欲しかったの。

美鈴 え？ あつとろし！ 産んで頂戴なんぼでも。この変化について行けれん。もういらんってギャーギャー泣きようったもんが……。

享子 それがやっぱり不安なのよ。あと二歳若かったらなあと思った。

美鈴 わからんなあ……歳の話。

享子 それであと少し若かったらって。

美鈴 連れ合いに対して優しくなった話。

享子 同級生だから、自分の身体が歳とったって感じるから、この人もきっとそうだろうと、優しく

くなった。近所の人にも優しくはないけど……。

美鈴 前から、根は優しいけど、向かったらよくケンカしてた。他人にはどう？

清吉 人にはもっと優しい。

美鈴 闘うフェミニストはどこへ行ってしまったのだろう？

清吉 やっぱ男には優しい。男好き。

享子 会合なんかでは、相変わらず厳しいんじゃないか？ 初めての総会でプカプカプカ煙草を吸ってる人がいたから、「なにかご質問は？」

って言われたから、「はい、あのたかだか一時間の会合で煙草やめませんか、未婚の先生もいらっしゃるし、伏流炎っていうのは一番危ないですよ？ そういうことご存じだと思っんで、せめて一時間の会合くらい煙草やめてください」って言った。そういう所までは許容量はない。男の人だからっちゃあなんは思わない。

美鈴 男好きだっていうけど、前、男の方をよく斬ってた。女のことば許しても、男は許さなかつ

た、食ってかかった。

伊田 二人とも、女性を擁護してたよ。なんでこれほどって思うくらいに……。

清吉 基本的には同性に厳しい。異性には甘い。

男とやり合ってたって言うけど、じゃれあってるだけじゃないか。男を批判してとことんはできんみたい。

美鈴 え？ しようつたように見えたでえ。

清吉 好きだからよ。

享子 好きな人と嫌いな人とはごっつい違う、はげしかったなあとは思っう。

清吉 嫌いな人は無視するがよお。

享子 うん。無視か……。

清吉 好きなタイプと嫌いなタイプはよくわかる。嫌いだったらやり合わない。

美鈴 男には文句いうけど、女はほけとくことがよくある。へすくーるらくだの平井さんに「芦谷さんって一番女性差別」って言われた。私、そうだと思った。できる女には「おかしいんじゃない

い？」って言うでしょ？ まだ気づきのない人には言わずに弁護してた。

伊田 いやあ、享子さんもよく弁護してた。「よくこんだけ弱い側に立つわ」って。私なんかパーパーだったから、「ああ、こういうもんかなあ」って思ってた。部落問題に対しても二人とも地区の側の人にたった発言だったから「そうか」と思ってた。

美鈴 単に男好きだったってたや。女を差別しとっただってや。

享子 じゃあ、へあごろはなんだあ？

美鈴 困ったもんだなあ。だけ、へあごろするんだ。

享子 女を差別するために？

美鈴 女を差別してる自分を知ってるから、バランスとるために。

享子 ふんなあ、今へあごろ休んでるのはバランス取れてるんか？

美鈴 フェミニストとかへあごろを掲げている

のは、私に欠如してるからかなあって思う。へあごろでもしてないと、普通の女の人の話に耳傾けないよ。あんまり興味が無いから……。どこかででもそれはおかしいから、バランス取らせるために出会いがあるんじゃないか？ だって、へあごろなんかでの話って悩みばかり。子どもの不登校とか、あれは子どもの問題じゃなくて、自分の問題だよ。おめえさんが悪いがなあ」なんて言わないけど。女たちは夫が遅れてて、気づいていないからって言う。そうじゃなくて、あるべきあなたの理想を夫に押しつけて、夫がそれに合わないからって文句いってるあなたはなに？ っていうんだけど……そんな話を興味深く聞けるのはへあごろだからじゃないかなあ。私いへあごろにかかわっていなかったら、何もしてないと思う。

清さん、享子の変化についてどう？

清吉 もとは変わらないけど、表面的には子どもとかかわりが大きいから今は……。だけど、もと

は変わっていないから、いつか爆発する。

享子 休火山か。

美鈴 死火山か休火山かそのうちわかるでしょ、せひその時は御連絡を……。大爆発を見学したい。清吉 一番下が離れたら……。もとに戻ると思う。

享子 人間って情性に流れることあるから、「PTAがあるわ、生協があるわ」っちゃあなんだったにして……。あ、気づいたら五十だったかなこともあり得る。それはそれで……。

美鈴 でも、振子がバーンと壊れることもある。

振子が大きくゆれるタイプみたいな感じがするけど、わからんなあ。

享子 歳ってことはよく感じる。

美鈴 うちい、三十九歳になったらしいけど、薔薇の花が三十九本来て、誕生日のプレゼントをいっぱいもらって嬉しいけど……。四十歳になったら何を考えるかと思って楽しみよ。

享子 歳を考える。大阪にシニアハウスができただろ？ でも、そういうふうにはきっと生きない

んだらうなあって。

美鈴 私、シニアハウス建てたい、みんなからお金集めて、自分ががっぽり稼いで……。

享子 その辺が変わったんだなあ。

美鈴 もうこの人とでなきゃ生きていけないって思ってるんでしょ？ 前はシニアハウスなんて考えてたじゃん。血縁だけじゃないみたいなのがあったじゃない？

享子 うんうん。思ってたのか思わしてたのか自分でもよくわからない。

美鈴 享子はすごく家族主義だもんね。なんで？

享子 自分の父親の死があるかもしれない。不安があるかもしれない。親も年だし。

美鈴 そうか、私は溢れて育ってるから、全然不安がない。うちの両親の方が年寄りだで、この前も朝倒れた。「おじいさん、大丈夫？ 死なへんでなあ、京都に行くけどいいか？」「うん、大丈夫だ死なへん、仕事だろ、行ってきんさい」「仕事じゃないけど……。まあ、行って来るわ」っ

「ちゃあなこと……。ほかのお兄ちゃんたちが「美鈴お前、隣におって、見てないか、仕事に行つて」と怒つたけど、「死なんつて言つてるから、いいがよお」って……。肉親に縛られて生きてる人の醜さを見るでしょ？ 血縁だけに固まつて生きてる人びとは、許し合うし、傷なめ合うし、それが嫌だで、違ふものを求めてた。享子はなぜか、家族って……。清さんを愛してるからかあつて思つてたんだけど、取り込むんだよね。貸したり、借りたりすればいいんじゃないか？」

享子 夫婦だけなら貸し合ひっこしてもいいと思うけど、子どもが混じつた場合には、お父さんを貸し合つて……ができればいいけど。私が気分的に清さんだけ貸すのは嫌なんだろうなあ。彼がよその子とキャッチボールしてると気持ちがよくない。うちの子はほけられてるのに……。「なんでお父さん」「見てるだけでもいいっちゃ、そのうちするようになる」

美鈴 嫉妬深い、片時も離したくないんだ。

享子 姉のこの夫婦を見ていて、離婚もしないであつちの女とこつちを行つたり来たりする男を見て、学生時代「結婚すまい」と思つてた。両天秤かけてる男は、やっぱりその状況が気持ちがいいからなんだろう……。都合がいいことなんだろうなあ……。なんぼ男好きでも、きっぱり離婚してつていうんじゃないと、イヤ。行つたり来たりはよくない。子どもに対しても、まず最低限、子どもの父をしないでおいて、近所の父代わりをしてもらつては困る、っていう感じがある。

美鈴 自分のものだと思つてるからでしょ？ そんな彼の勝手じゃないの？ 人の人生じゃないの？ 清さんは何も言わないでしょ？ 彼は享子の人格を認めているのに、享子は……。

享子 私いい加減なのよ、だから、主義やイズムじゃない。「これは自分」っちゃあうのがないんじゃないか？ 剥いていつたら何にもない。ハッハッハ、あんたは残すと思うよ。何か。

美鈴 ないない、まんちゃらけ、その日の気分。

## 「お母さん 私死にたい」事件

芦谷美鈴

〔事件のあらまし〕

一月末日、空手道場に行っていた娘（中2）が泣きながら帰宅。「お母さん私死にたい、今まで生きてきてこんなに侮辱されたの初めて：死にたい」と。

泣く娘をなだめながら、なんとか事のいきさつを聞き出す。

〔いきさつ〕

空手が終わり、「さようなら」と子どもたち数人が会場を出た時、戸がボタンと閉まってしまった。みんなの手が合わさってしまったからだったけれど、先生は私だけだと思っていたらしく（後でわかったこと）、窓から覗いて「ちょっと待て」と。「なんだろう？」

と思つて立ち止まるといきなり罵声を浴びせられた。何のことで怒られているのかわからないまま一方的にわからないまま怒られていると「わかったがよう」と文句を言つたと聞き違いをして怒っているのだとわかる。「言っていないせん」と繰り返す言うが、「言つた」と頭ごなしに何度も何度も言われてすごく悔しかった。そして先生はそのまま練習に戻ってしまった。娘はそのまま泣いていて、再び取り合ってくれたのは五分後くらい。「ここで主張しなければいけない」と一生懸命「言っていない」と主張。先生は鼻で笑つてから、「じゃあもしかしたら先生の聞き違いだったかもしれない」と馬鹿にしたように言つたけど、その時の口調は本当にそう思つて言っているように思えず、

早くこの話をやめたいという態度が見え見えだった。でも一応言葉で「ごめん」と言われ、なにも言えなくなつて家に帰った。

### 〔経過〕

これを受けた私は、「子どもがこれだけ傷ついているということを相手に伝えなければ、彼らはまた同じことを繰り返す」と、空手道場の責任者に連絡を取り、「責任者を交えて話し合いをしたい」と申し込む。やっと二週間後に我が家に来ていただくことになり、話し合いの場を持つこととなった次第。本人から「人権問題の判断できる人たちに傍聴してもらいたい」との強い希望に、日頃から我が家に出入りしている人権問題関係者が駆けつけた。話はのっけから、道場の責任者T氏が「部外者がいるから話し合いはしない」、と主張。なかなか本題に入れなかったが、時間をかけて「当事者であるこずえの気持ちを尊重して欲しい」と話し合いに入る。以下は当日の話し合いをテープおこししたもの。

■二月二十三日

こずちゃん「お母さん私死にたい」事件の話し合い

岸本こずえ（当事者 中二）

O先生（当事者）

T氏（空手道場責任者）

芦谷美鈴（こずえの母）

関野正（毎日新聞記者）

岩本浩（小学校同和教育推進部）

伊田幸子（同右）

山本真澄（同右・小学校教師）

小坂義明（他町村教育委員会）

第三者をまじえて話し合いたい

T氏——この問題は本人も言ったことは認めているし、

とりあえず当事者で話し合いたい。

美鈴——当日帰ると泣いて「お母さん、私死にたい。

今まで生きてこれほど侮辱されたことはない」と手がつけられなくて大騒ぎしました。



とにかく死なせちゃならないので、こずえの信頼している人々にきてもらってなだめ、話を聞き出したのです。すごく傷ついていると

わかったので、すぐにOさんの家に行こうとも考えたのですが、これは私の問題ではなくこずえの問題なので、こずえがどうしたいのかを大事にしなきゃと思ったのです。こずえに「どうするの？」と尋ねたら、「O氏とだけの話はいはしたくない、言った言わんの話に終わるだけだと思うから……冷静な判断のできる第三者を交えて話し合いをしたい」と。私は彼女がそう望むのなら絶対そうすべきだと思いました。それで駆けつけてもらったわけです。

T氏——私としては当事者同士か、お母さん、田中君ぐらいでいいと思ってますので、今日はこの話は……

関野——毎日新聞の関野です。記事にするしないはともかくとしてお話を伺いたい。

岩本——人権の立場で運動している者として話を聞きたい。

T氏——私は話に入ってもらわなくてもいいと思います。状況もよくわからないわけですし……

こずえ——当事者だけが話をしてこれ以上何の解決があるのでしょうか？ 人権感覚の話がわかる人がいるところで話したい。

T氏——先生はまあ話は聞かんといけん立場だし、できれば田中さんと……くらいで話をさせてもらいたい。

こずえ——そういうことで済む問題なのでしょうかね？  
なんでほかの人がいたら話ができないんですか？ 私は自分が感じたことは自分が一番よくわかってるわけだから、当事者だけで話をするのは怖い。

T氏——だから僕もいるし……。  
こずえ——たとえ先生がいてくれても怖い。

O氏——どういふふうに入権を傷つけられたんか？  
こずえ——話してもいいんですか？ じゃあ話します。

T氏——まあ待て。田中くんと三人くらいで話すつもりだったので、人数が多いからってことじゃないんですが、やっぱり……。

こずえ——きちんと話ができる人がいてはいけないのですか？

T氏——話がわかるというのがどうということかよくわからないのですが……。

美鈴——話がわかると彼女が判断する材料は、たとえば社会的に見て中立の立場に立てる人——新聞記者とか弁護士とか……同和問題等で日頃人権感覚の目覚めのある人ということらしいです。私は彼女が傷ついているのだから彼女が救われるためには、何だって協力したいと思いました。

こずえ——T先生は何があったか知らないわけだからそういうふうと思うかもしれませんが、私はそういう人のいないところで話しても解決しないと思います。多分、T先生も私が何を傷つけたのかわかってないんでしょうね。

言った言わないだけの問題じゃない

O氏——状況を話しますと、ドアを強く閉めたので注

意したら「わかったがよオ」と言ったと思ったので、「なんだあ、今の言葉は」ということで……「言った言わない」の話になったんですね。僕にはそういうふうに関心したので吐ったということです。「私が言っていないと言っているのになぜ信じてくれないのか」ということだと思う。本当にそれを言っていないくて僕の勘違いで吐ったのなら、謝らなければいけないんですけど……。叱るのは、当然悪いことは悪いと、普段から、空手の技術的なことだけでなく、行儀や躰けの教育をしていますから、憎らしくて吐ったというわけじゃない。だから言葉の聞き違いがあったんなら謝ります。

こずえ——私は一回謝ってもらったんです。けど次の日にU君（空手に行っている人）から、O先

生がその後「やめたかったらやめりゃいいがなあ」と言われたというのを聞いたんです。本当にあの時悪いと思って謝ったのなら、そういうことは口から出ないと思うけれど……。

O氏——僕が「やめたかったら……」と言ったのは、

こずえちゃんが「私のことを信用してくれないだったら私やめます」と言ったから、言った。だから僕は別にやめたかったらやめたい。本人が逆に僕のことを信用してないってことだから。

こずえ——あたりまえだと思います。相手が信用してくれないものを信じれますか？

美鈴——ちょっと待った。整理させて。こずえがいけないことを言ったので嫉妬しようと思って吐いたと。そのことを言っていないなら謝ると。実際こずえはどうだったのかを聞きたい。

こずえ——私は怒られている時、自分が何を怒られているのかわからなかった。わからないまま怒られてたんです。

O氏——「ドアくらい閉めて帰れよ」って言ったら、

「わかったがよオ」と言ってガチャンと閉めた。それで僕は「こら、ちょっと待て。なんだあその閉め方は」と言った。

こずえ——ちょっと待って下さい。強く閉めたのを怒ってらしたのですか？ それだったら皆の手が合わさって強くなってしまったのは悪かったと思います。でも、あの時は「強く閉めたのはどうでもいいけど、言った口の態度が許せない」と。「強く閉めたのを怒っていらっしゃるか、何を怒っていらっしゃるかかわからない」と私はその時に確認しました。そして「口の態度が許せない」とおっしゃいました。それから私が「言っていない」と言い、周りの人も誰も聞いていないと言っているのに、先生がどうして信じて下さらないのかかわらない。「素直になれ」とおっしゃいましたが、言っていないことを言っていないと言っているのに、どこが素直じゃないのかもわか

りません。権力者が自分の支配している者に対してああだのこうだの言っているらしいように対応されましたので。

T氏——今、権力者がという話が出ましたが、我々も武道を教えているので、嫌とか言葉使いを少しでも教育できたらいんじゃないかという目的でやっているとですね。だから権力とかいうことでなしに、O君はこずえさんが言ったと思ったので注意したわけです。そして行き違いがあって謝ったんだけど謝り方がどう……いうことですね。一応彼は謝っているんだよね。彼は嫌として教育活動としてやっている。

こずえ——嫌とかは一応理解できますけれど、私がもし言ったのであったらわかる。しかし私が「言っていない」と異議申し立てをした辺りからちっとも話がわからなくなって、嫌は、「異議を申し立てた者に対して何も聞かないという態度ということではない」ですよ。異議を無視して人の気持ちをいくら傷つけても

自分の意見だけで、話を進めるっていうのはおかしいんじゃないでしょうか。

T氏——だから違ったら悪かったと……。

口だけで謝られても傷は癒えない

こずえ——謝るといふのはそういうことではないんじゃないかと思うんですけど……口で謝るのは全てではないし、逃げなんじゃないかと思えます。多分、先生もそう聞こえたのなら、簡単に悪いとは思われないと思います。

美鈴——勘違いというのはそういうこと。自分が本当にそう聞こえたから怒る。だけど、「違う」と言った時点で、相手が子どもだったから意見を聞くという姿勢がなかった。そういう姿勢が全くなかったことに対しておかしいと言っているわけです。

こずえ——もう一つ言いたいのは、言っていないことを証明するために、そばにいたNちゃんたちも

証言してくれましたが、私も今から考えると筋の通らない変な理屈を言いました。それを先生は笑われました。一生懸命言っている者に対して笑って、挙げ句に「言っていないなら、じゃあ自分が悪い」とそんな謝り方じゃあ……。それに「やめたかったら……やめりゃあいいがなあ」というのも、私が「信用してくれないのならやめます」と言ったのだからわかりますが、私のいない所でそんなことを言う意味があるのですか？　ってことも疑問です。本人のいない所で第三者になぜ言わなくちゃならないのかもわからない。私は怖かったけれど、先生にも周りの人にも誤解されたままはイヤだと思ったので話しました。

美鈴——そういう考えだったの？　私はショックで傷ついたから私に何とかしてくれてコールドカと思った。「そうか。こんなことはほかにも沢山あるんだろうな。他の子どもはそういうことがあっても親に言わないだろうから、ま

あ、私は知ったのだから、Oさんと話すか」って思っと思ったんよ。子どもの権利条約が批准されようとしているのに、まあ、この時期に子どもの人権を侵すなんて許せないわって思ってしまったわ。

こずえ——自分が聞こえたことだけを信じて人を攻撃するのはあまりにも己だけを信じ過ぎているんじゃないだろうか？

美鈴——でも人は自分に聞こえたことだけを信じて行動するよ。だけど「違う・No」という申し立てがあった時点で、相手が子どもであろうが「え？　違う？」って耳を傾けるのが大事じゃないかって、こずえちゃん言いたいんじゃないの？　誤解は誰にでもあるから……。

こずえ——誤解されたことを怒ってるんじゃない。

T氏——誤解をしたことに対して彼は誤解をしたと思ったから謝ったんでしょ？　謝り方が……ってことなんでしょ？

こずえ——誠意がないと思う。誤解だったとは思って

らっしゃらないと思う。私がそこで泣いたから面倒くさくなって、早く帰ってほしかったのだと思う。そういう言い方だった。だからああいう謝り方だったら謝ってほしくない。

「わからないんだ」って言ったほうがいい。そしたらなぜわからないのかの話し合いができる。「ごめん」って言われると、どう思っているかの話し合いができない。お聞きしたいのは、「言っていない」と言っているのに何回も連発して、「言った。お前は言ったんだ」と強い口調で繰り返されたんです。なぜそれを聞こうとされないのですか？ それは駄とか礼儀を教えようとされてそういうふうに言われたのでしょうか？

〇氏——僕は言ったと思ったから、駄しようと思って言った。

こずえ——なぜ相手をおびえさすような口調で大きな罵声を浴びせなければならぬのかわからない。

〇氏——それは僕の口調ですよ。

心のどこかで「相手は女」「相手は子ども」

と想ってる

T氏——誤解を生むっていうのは……。

こずえ——ただ誤解だけだったら、一方は笑って、一方は死にたいとまで思う差はどこから出てきたんでしょう……。

〇氏——それが個人の感情の差だと思う。僕だってもしかすると、あれだけのことを言われたと思ってそう思ったかも知れない。

こずえ——私が抗議したことに対してですか？

〇氏——そうですよ。

こずえ——私が「言っていない」と主張することが侮辱に繋がるわけですか？ 先生と生徒という立場をどうお考えですか。対等に話をしてはいけないのですか？ 教える側と教えられる側に別れるけれど、人間としては対等だと私は思っていましたから。じゃあ間違っていました。

T氏——そうじゃない。自分の思ったことは言えはい。

こずえ——じゃあ、どうして侮辱されたと思われるのですか？

T氏——感情の差、男の子、女の子の違いもあるし、感情ってのは一人一人違うから……。

こずえ——私は女であるし、先生は男であるし、子どもであるし、大人であるし……ってことですか？

T氏——そうじゃない。同じ言葉でも皆受け取り方が違うって意味。

こずえ——じゃあ、O先生の場合は相手に思っていることを言われたら侮辱されたと感じるってことですか？ O先生にはみんな言いたいことを言わないのですか？ 自分と反することを言われたら侮辱と感じるということですか？

O氏——そんなことはない。取り方もあるし……。こずえ——じゃあ、あの時私が「私は言っていない」ということがどうしてO先生を侮辱することになるのですか？

O氏——今回がどうこうでなしに、こずえちゃんのよいうな取り方があるのだったら僕もそういうふうに取り方があってもいいかもしれないという話。

T氏——個人個人の感情の違いで……。

こずえ——感情の違いで、笑うのと自殺するのという違いが出たってことですか？

美鈴——やはり立場の違い、教える側と教えられる側、男と女であるからと、どこかで思っているんじゃないませんか？

T氏——個々の感情の持ち方の違いがあるってこと。

こずえ——そりゃ、感情は違うけれど、たとえ感情が違ってても相手に死にたいとまで思わせるほどのことを言ってもいいのかってこと。

T氏——まあ、発端はそういうことで、O先生は謝ったって感じがあるし、こずえ君は……。

こずえ——じゃあ、あの時謝られたのはどういう意味だったのかお聞きします。

O氏——僕の気持ちには、僕は半分正しいと思ったまま「この子が言っていないと言ってるから」と

いう気持ちで謝りました。「なんで私が言っていないと言っているのに信用してくれんだ」と言われましたので、反対に「あなたが言っていないという証拠はありますか?」と言った。そしたら「証拠はない」と言った。証拠はないわけだよ。だからお互いさまで……僕は半信半疑のままでした。

こずえ——証拠なんて、言わない証拠があるはずない。そんなことを聞くなんて……。

「そっちも証拠なんてないじゃないか」なんて責め方はしてはいけない。テープに取っているわけでもあるまいし……。

T氏——感情の行き違いから……。

「相手がこずえだから」言ったのでは……

こずえ——私が帰って落ち着いてから、「やめたかったらやめればいい」というセリフが出たということ聞き、やっぱり私の感じたことは正し

かったと思った。「やめたかったらやめればいい」というのは私に対して言えばいい言葉であって、他の人に言って意味があるのですか?

O氏——「どうした?」と聞いたから「こうこうでやめたいと言ってる、やめたかったらやめたい」と言った。

こずえ——自分の感情だけでおっしゃってるわけだからずるいんじゃないですか?

O氏——「やめたい」と言った。

こずえ——知らない人に都合のいいように話されたら誤解される。

T氏——事情は話してないんだろ? いきさつは話してないんだろ?

こずえ——それならよけいに事情がわからない分だけ「やめたかったらやめたい」と言われただけ、意味もなく反抗して……というふうに受け取られてるかもしれない。ご自分にも状況がわからないのなら「わからない」でいい



んだし……。だけどそんなことより、対等に話をしてはいけないのか？　ということをお聞きしたい。

T氏——対等でいい。

こずえ——そしたら、対等にものを話そうとしている者に対する態度はああいふものなのですか？

それともあの時は特別に興奮していてあんなったのですか？

O氏——ケース　バイ　ケースです。そりゃ言われたことに對していつもああいう対応をとったらあほやわな。

T氏——なんかの感情の行き違いがあったから、ああいうふう……。だから謝った。

こずえ——自分が腹立ったら人のいうことを聞かんでもいいか？　人をいくら傷つけても許されるんか？　謝ったらすぐに許されるんか？　自分が興奮してたら、何を言ってもいいんか？　だってまるで邪魔者扱いだったもん。

T氏——興奮していたら何を言ってもいいということ

ではないが、そこが誤解してたからということとで……。常に感情が同じレベルで話ができたらいいんだけど、感情の起伏がどうしてもあるんでね、それがいいか悪いか別だけども、こずえ——だけどこれから先もこういうことで生きとつたら、人を何人殺すかわからない。

T氏——そういう意味からすると、今回のことをいい教訓にして……。自分の行動が人を傷つけたりしてるということに気づけば、彼が子どもたちに教えたりするのにいい勉強になったんじゃないか。

岩本——こずえさんが言いたいのは、そのことが起きた時、こずえさんだから言ったということとはありはしないか？　ということ。ほかの者だったら何でもないことが、こずえさんは弁が立つから、普段から、子どもの癖に……。とか思っている自分の感情が出たんじゃないか？　こずえさんは敏感だから、バーンとそのことを感じたんじゃないか？

○氏——それは無いと思います。

こずえ——なぜあれほど言っても信じてもらえなかったのかという根拠がそうかも知れないと……。

T氏——それは憶測でしょ？

こずえ——本人がそういう気持ちがあるかないかはわかりません。

T氏——わからないでしょ？ あまり憶測で物を言われても……。

山本——ただいま、○先生にお尋ねしています。

○氏——そんなことはありません。

山本——それぞれに同じ対応をされますか？

○氏——すると思います。

美鈴——へえ？うちは違う。同じ対応なんてできない。

塾してても、一人一人に合った対応をする。

○氏——そういう意味じゃなくて、したことに對して怒るか怒らないかということ……。

山本——今回のケースについて。こずえちゃんが何十回も「言っていない」と言っているのに。二、

三回で信じてくれる子と、そうでなくて、何

十回も「言っていない」と言ってるのに信じてもらえなかった。その違いは出ませんか？

○氏——他の子と比べてってこと？

T氏——そこまであれするのは……。

山本——それは、○先生にお聞きしてるんです。それぞれの先生で違うはずだから、T先生にはT先生の教え方があるでしょうし……。

○氏——そうだなあ、感情的になっとってようわからんけど、それは確かにあったかもしれない……。

岩本——普通なら、自分の言葉で抑えられるのに、それに対して言われたから余計に……。そこに権力の構図がある。力でバーンと抑えつけようって感じがあるような気がする。これが別の子どもだったとしてバーンと閉めたことは事実でも、すぐに収まったかもしれないけれども、こずえさんから言われたことによって威厳みたいなものを傷つけられた。それで、どんどん言ってはならないことを言った。

T氏——そりゃ人間ですから感情も違うでしょうし、

その場その場によって違うでしょうけど、こずえ君だから言ったやないかというのは…。

山本——それは一つの側面で、彼女がそのことをとても気にしていたので。

美鈴——彼女はすごく大人を見てる。だからおもしろいですけど、大人によっては、煙たい存在だろうと思うんです。こずえをおもしろがる人と煙たがる人に別れるというか……大人の生き方を問うから。だから「私だから煙たがられた」と感じたのじゃないか？

こずえ——そういうことも感じた。

美鈴——こずえが言っていたのは、人を相手の仕事はプロだから、それではいけないということ。失敗は許されない。「私だからよかったけれど、傷つけられたことを言葉にもできない子どもにも、しょっちゅうこんなことを言っとなさるのだろうか？」ってこと。人を殺すのは簡単だから。そういうことが相手の人権を傷つけるということに気づいてほしい。

こずえ——しかし、そういうふうには理解されないんでしょねえ。礼儀を教えるんだから、礼儀を

教えるたびに死なれちゃかなわんってことみたいですね？

〇氏——礼儀とは離れると思うで。

美鈴——少なくとも、〇君はこのたびの事件がこずえの人権を傷つけたということはわかり頂けましたでしょうか？

〇氏——気がつかずにね。

美鈴——人権を傷つける時はだいたい気づかずにする。気づいていれば、技と一緒に、とどめはささないのよ。気がつかずにやるから、知らず知らずに死に至るまでやるのよ。こずえちゃん、あなたの人権が傷ついたのがわかっていようんさるから、もういいじゃない？

本当にわかってほしい…

こずえ——わかったらいいの？ 何がわかったの？

O氏——それやあわかってます。この前は、半信半疑でしか謝らんかったって。

こずえ——私があの時どれくらい悔しかったのも、わかったの？

美鈴——それは、彼の感受性に応じてわかるしかない。あなたと同じだけわからないと駄目っか？

こずえ——それはまあいいけど……人が言ってる時にせせら笑ったりしてどういうこと？ 馬鹿にしているんじゃないの？

O氏——僕もどういふ顔してたかわからないけれど、それも取り方だと思う。

こずえ——私を軽く見てたから、笑ったと思う。

美鈴——子どもの癖に、って感じがあったってこと？

O氏——それも他の人からどういふ時にどういふ表情してるか聞いたことがないからわからないけれど、「癖」にってのはあるかもしれん。

こずえ——あると思うよ。私だってあるもん。

T氏——誤解したことに對してすぐに謝らんかったんは、そういう気持ちがあったんじゃないか？

てこと。自分のことを信じてものを言ってる  
と、なかなかそういうことに気がつかない。

間違いに気づいてからは反省しとるやろ？

こずえ——でも私には、態度は見えない。個人個人の感情の問題だと思っていらいっしやるから、何がわかったのかなあと……。あの馬鹿にされた笑いは何だったんだ？

T氏——馬鹿にされた笑いについては本人は気づいてないって……。そこまで言ったら彼の心の中まで覗けないし……。

こずえ——どっちにしても、ああいう所でああいう笑い方されたらたまったもんじゃないで。それを感情の問題で片づけられた時にゃあ……あれは一体何だったんだ？

T氏——「笑った」って話は、また「笑った、笑わない」って話になるから……。

こずえ——笑ったかどうかは、本人に記憶がないんだから、気づかないところで私を馬鹿にしてるんじゃないか？

○氏——お前だからどうこうということは……僕は覚えてないから、笑ったかどうかはわからん。

こずえ——私が見たのだから笑ったことは事実。

○氏——それも取り方なんだがなあ……じゃあ、人と話をする時は無表情で話をせんといいけん。

美鈴——傷ついた側が傷ついたって言ってるのだから、傷ついたんじゃない？

○氏——それはわかります。

T氏——○君自身も自分の心を育てていかなきゃいかんって、自分が気づかない所で……やっぱ、相手を傷つけてるってことに気づいて……

こずえ——そういうことに気づいてないんじゃないですか？ だって人と話す時に無表情とかって私の話を聞いた今も……私の話がわかってないんじゃないか？

「自分が差別者だ」と気づくことのむずかしさ

美鈴——こずえは、○君に自分の中に差別性があると

気づいてほしいってことね。今後○君がどうなさるかでしょ？

こずえ——今の時点で無表情の話が出てくるなんてそんな変な変わり方は望めないんじゃないかと思うのですが……。

T氏——それは○君だけでなく、そういうところをお互い注意し合って、○君もこれから……。

こずえ——相手に指摘されたらまた腹が立つんじゃないか？

美鈴——また同じだったら学習効果がなかったってこと。次に起こってみたいとわからない。

こずえ——もっと敏感な人だったらわかると思うけど、○先生だから。今までそんなふうに生きてきた人が今日一日こんなことを話したって……わかる？

○氏——だから、逆に僕は信用されてないわけですね。そりゃ仕方ないと思う。僕も自信ないし……。こずえ——信用されてないって、それはこういうことがあったから、自分を信じてもらえなかったか

ら、相手を信じられなくなったんであって……  
相手を信じたら、自分が傷つくことがわ  
かった。正しいことを言えばわかってもらえ  
るって思ってたのが甘かった。どうなんだし  
ょう。私が死にたいと思ってたのはあれは何  
だったんでしょう？ O 先生が人権とかにつ  
いてどう思ってるのかがわからない。

美鈴——感じるでしょ？

こずえ——感じるけど、それが全てではない。いま自分  
が人権のことをわかってないというようなこ  
とを言われ方をしてることに對してどう思わ  
れますか？

O 氏——こういうこともあったんだあ……自分が氣  
づかずに人を傷つけてることもあるかもしれ  
ないし、よく勉強してないし……こずえちゃ  
んが言うことは、「ああ、こういうこともあ  
るんだなあ」ってわかった。氣がついてあ  
ってはいけないことだけ……。

美鈴——氣がつかなかったから許されるってことはな

いと思う。自分が差別者だと氣がついている  
かどうかだと思う。私は差別者ですよ。氣が  
つかないことが怖いと私は思います。

O 氏——氣がつかないところで傷つけたということは、  
僕は認めます。

こずえ——謝ることは、自分が悪かったごめんなさ  
いってことですよね？ いま謝った感じと、  
状況はちがうけど同じ感じ……わかる？ (美  
鈴たちのほうを向いて)

美鈴——わかった。

こずえ——これが終わって、家に帰ってまた、「あいつ  
ら変なことを言いよったわ」ってことになら  
へんかなあ？

美鈴——わかった！ 本當にわかったかどうか疑わし  
いような言い方なんだO 君。ヘタなんだ。

O 氏——だからこういう状況で話してもわからんわけ  
だがな……ここで何を言ってみてもわかって  
ないとしたか受け取ってもらえんと思う。

T 氏——ヘタなのかどうかわからないけど、これから

彼がどういふうにやるかが答になるんじゃないかなあ……。

こずえ——じゃあ「ごめん」って言ったあの時の気持ちと今の気持ちは違いますか？

〇氏——そりゃ、違う。あの時は半信半疑、でも今日はいく気持ちがわかったし……「こういうこともあったんだなあ」って……。

こずえ——半信半疑「あったんだなあ」だもん……。

〇氏——事実は事実だからわからんよ。でもこずえちゃんはこのことを思ってた、こういうことで傷つけたというのはいわかった。そういうこともあるということをお頭においてこれからの指導にあたるよう努力しようと思います。岩本——こずえ君のいうことはわかったと確認したけど、やっぱりそうでないじゃないか？ と自分の中ではある、ととらえる。

Ｔ氏——しゃべり方がヘタだということはある。的確な言葉が出てると、聞こえるか聞こえないかということもあるが、こずえ君の人権ってこ

とに関して今わかってると思う。それがうまく言葉に出てこないってことだと思う。

こずえ——今日、私は「言っていない」という事実と、「私は傷ついた」という事実を相手に伝えたわけだけど、じゃあ傷ついたら相手に言わないと相手にはわからないのかってこと。

〇氏——僕にはわかりませんでした。

こずえ——口に出して「ああそうか」と思う人と、そう思わない人もいる。もしかしたら〇先生は私たちに言いたいこと言っていないんじゃない？  
Ｔ氏——こういうことがあって、今回話し合いをして、今までこういうことに気づいていなかったのだから、だから、これからどういふうにしていくかを問うて……。

こずえ——だったらいんですよ。

美鈴——いい？ はい。じゃあ遅くなってしまいました。ごくろうさまでした。



## 「お母さん 自由服着ていくけえ」事件 無替悦子

六年生の息子、大輔が、卒業間近の二月の初め、学校から帰るとこんなことを言いました。「お母さん、

明日からジャージ着て行かんけえ。校長先生がジャージは制服に決まっとるわけではないけえ、何着てもええって言われたけえ」

嬉しくて嬉しくてたまらない様子の太輔でした。

太輔のクラスの男の子、五、六人が、校長の所に、「自由服着ていいですか？」と談判しに行ったということです。

「よくやった！ さすが太輔！」

私も太輔同様ルンルン気分なのですが、問題は太輔以外の子どもたちが自由服を着て行くかどうかです。いくら校長に許可をもらっても、太輔一人自由服を着

て行くのは、たいへんむずかしいと思ったのです。とても勇気のいることだと思ったのです。

私の心配どおり、他の子どもたちは親の反対で今までもジャージを着ることにしました。でも太輔は一人でも自由服を着て行く決意をしていたのです（これは私の嬉しい見当違い）。

途中で当時二年生の弟の優も加わりましたが、この問題は私たち親子にとって楽しい学習であり、辛い試験でもありました。楽しい学習イコール辛い試験とは、今まで見えていなかった学校の教師のいろいろな考え方が見えてきたからです。

太輔、優の気持ちを尊重してくださる先生方は少なく、大多数の先生は非難の目でこの兄弟を見ていたよ



うです。針のムシロと化した学校に、毎日、自由服を着て行く兄。大輔に「この責任どうするつもり？」と問いつめた先生もいます。優の担任は、自由服を着て行った優を見て、「先生は優くんの服はカッコ悪いと思いますけど、皆さんはどうですか。カッコ悪いと思う人、カッコいいと思う人、何とも思わない人」とカッコ悪い人のところで、優以外の全員に手をあげさせたのです。

優は友だちに裏切られたと泣いて帰りました。

私が抗議の電話をかけても、先生は反省の様子なし。ただ、私が人権問題だと言ったことだけが頭に残っていたらしく、その後、優が自由服を着て行っても、何も言わなかったそうです。

学年末の懇談の時、私が「先生、今は自由服を着て行っても言われないそうですね」と問うと、「お母さんにあれだけのこと言われたのに、もう何も言えませんが」ですって！ 教師全員が賢い人だと思っているわけではないけど、あまりの次元の低さにア然！

子どもの人権に関して同じレベルで話せる教師が少ないことがわかっただけでも、良い勉強だったと思います。

でも子どもたちはこんな教師に同和教育をして頂いているのです。普段、子どもの人権を無視している教師が、同和教育の時間にだけ「差別はいけない」と子どもたちに教える。本音と建前の使い分けを教える同和教育！ こんな同和教育で子どもたちの人権感覚が育つとは思えません。

この大輔、優の服問題は、子どもたちにはもちろん、教師、保護者間に大きな問題提起をしてくれました。親たちも今まで何とも思わなかった子どもの服を改めて見直し、家族で話し合う機会を何度も作ったようです。

我が家にとっても、将来、解放運動の担い手となつてほしい子どもたちに、一人でも聞える勇気を与えてくれた問題でした。

## 「お母さん ボク学校に行きたくない」事件

日出嶋香代子さん

二か月ほど前、「子どものことで困ってる」と、あるお母さんから相談を受けた。話を聞くと、「学校に行きたくない」と言っているとのこと。ちょうど湘南学園に行く計画を立てている時だったので、「一緒に行く?」と誘ったらついて来ちゃって、彼(その子ども)と一泊二日の楽しい時を過ごした。楽しくて小さい子どもたちの面倒をよく見る優しいお兄ちゃん。顔もいい顔してて……私は大のお気に入り……喜んで、こき使ってしまった。その彼のお母さんもへあごろの会員。原稿をお願いしたら、みんなと話しながら、自分の考えをまとめたほうがいいということなので、井戸端会議ふうの話をテープに取り、テープおこしました。

なぜ行きたくなくなったの

日出嶋 今年の二月頃、突然「僕、勉強せん」と言ったのがきっかけだった。それがきっかけで学校にも行かなくなった。それまでもちよくちよく悪いことはしていたが学校には行っていた。

美鈴 あきらが勉強しない宣言をして、学校に行かなくなった経緯は?

日出嶋 暴力っぽい教師がいたことが、原因みたい。

「いろんなことで先生に怒られる」と言っていた。親は「お前が悪いことをするからだ、違反の服を着て行くからだ」と言っていた。部活も好きだったのにその先生が担当で、先生によく叩かれた。今から思えば、そのことが原因だった。

美鈴 学校で叩かれていていい子でいられるほうが不思議だと思っただけ……。

日出嶋 あきらだけが叩かれるという声も聞いて、この子だけがターゲットになっているように思える。問

題が大きくなってから先生に会ったが、先生はそんなことはないと言う。

美鈴 先生のほうも考えていて、叩いたら問題にするような親の子どもは叩かないんじゃないの？

日出嶋 確かに、主人と先生はテニスを通じてよく知っていて、試合の時なんかも見に行つてビンビン鍛えるように言っていた。親はあきらが叩かれてもくじけずに頑張る子どもだと思っていた。でも本当は神経も小さく、叩かれることを気にしていたのかも知れない。

畑上 人前で叩かれて嬉しい人がいる？

美鈴 余程の自信過剰の子ならともかく、普通の子どもはくじけたり反感持つんじゃないの？

日出嶋 そんなことがあってから、部活をさぼったり、その先生の授業を受けないと学校に遅れて行くようになった。主人は本人が悪いから怒られ、学校に行かないのはおちこぼれだ、と考えている。そして主人はそんな子どもを本当に嫌っているのか諦めているのかわからない……もともと勉強は好きなほうではなかったけれど、それなりに頑張っていたと思う。

美鈴 本来、学ぶことは誰も好きなのに、人と競わせたりして変なコンプレックスを抱かせて嫌いにさせているだけだと思う。親はどうしようもないおちこぼれだと言っている子でも、場所や環境が変わると勉強しようという意欲がわいてくる子がある。

畑上 いろんなことで傷つけられた子どもを見ていて、何でここまで追い込んだのか腹立たしい。現状では親も教師も子どもを傷つけていることが多い。本来楽しいはずの学びが苦痛になっている。

日出嶋 今からでもやり直しができるので、大目に見てやってほしいと先生に相談した。

### 子どもの問題は夫婦の問題

美鈴 今の学校の体質はあきらには解決できない問題で、教師や学校側の方針を変えないと駄目。子どもに問題がおけると、本当は親の問題であつたことが見えたりすることもある。

日出嶋 主人は子どものほうが悪く、きまりを守らな

いからだ、学校に行かないのも周りの責任ではなく、自分が勉強しようという意欲がないからだと言ってる。

美鈴 ご主人は子どもに何を望んでいるの？

日出嶋 主人は普通に学校へ行って、部活をして、勉強はまあまあでいいから、自分の行ける高校に進学して、その中で自分のやりたいことを見つけてほしいようです。現在の一般常識では高校に行くのが普通だし、どんな仕事をするのにも中卒では困ると思っている。畑上 外見や世間体だけじゃないの？

日出嶋 高校を出てから好きな仕事をすればいいと言っている。

美鈴 親の「普通」を押しつけてるんじゃないの。

日出嶋 〈あごろ〉に入っているんな人たちの考え方を聞くと、いろんな価値観の人がいるのはわかったけれど、やはり進学は大事なことだし、行ってほしい。

美鈴 子どもが問題をおこす背景には、必ず父親、先生が絡んでいる。父親が問題児で、子どもはまともよ。塾の相談でも父親学級を開いてほしいとよく言われる。日出嶋 父親のほう時代遅れ……世間体かな、いろ

んな所へ出掛けていろんな話を聞くと、子どもの気持ちかわかってきたような気がする。

畑上 この家も子どものことで問題はおこっていて、父親が戸惑っている。父親の考え方を変えなければならなし、父親を変えられるのは母親だと思う。

日出嶋 最近はお子さんが問題なのではなく、大人のほうの問題だと思える。あきらを見てみると、美鈴ちゃんの前と父親の前では、全く態度やしぐさが違うのでびっくりした。

美鈴 結局はあきらの人生なのだから、あんまり深刻に考えずに自分が楽なほうにいけばいいんじゃないの？あきらの考え方を直そうとか思わずに……。

日出嶋 話していると、あきらの問題でなく、私たち夫婦の問題だと思える。主人とよく話してみなきゃ。

美鈴 あきらのように感受性の強い子は、自分なりの表現でそれを言っているのよ。優しい子よ。

畑上 すれ違いの夫婦にならずに子どもの問題をきっかけに夫婦が歩み寄ることが大切だと思う。そうしないとどちらかが無理をして、身体をこわす。

# 只今フェミニスト休戦中



小倉耀子

はじめに、ものすごく支離滅裂な文章になってしまいうたことを断っておきます。というのも、原稿の依頼を受けたのが締切り数日前。半月後に延ばしてもらったものの、こちらは生後二か月の子どもと孤軍奮闘している身。出産のための里帰り先から帰宅してみるとアパートはゴミと洗濯物の山。冷蔵庫の中の残り物にはカビがはえてたりして……。「私がない間たいへんだったのね」と夫を思いやれたのは最初の三日間だけ。四日目からはいいかげん頭にきて「男なんて、男なんて……。もう別れてやる。二度と結婚なんかしないから」とどなりたくなる自分とせめぎ合いながらの日々。こんな私に『あごろ』という女性解放をやっているような雑誌に何が書けるかしら……とまるで自信がないのです。

「けれども、これが大半の女たちの実態なのではないだろうか。机上の空論のようなフェミニズム論は専門家にやらせればいい。女たちの生の声の『はけ口』であっていいんじゃないか」とあえて聞き直して、ペンを執り始めた次第です。

\* \* \*

私に原稿を依頼してくれた芦谷美鈴さんは鳥取じゃあ有名なフェミニスト（その彼女も素顔は男に弱い一人の悩める女らしいですが……）。私にとっては怖い存在なのです。というのも、私が結婚する時、「結局、普通の結婚なんだね。なんで小倉さんだけが会社辞めるの？ 男のほうがやめた方がいいの」と言われたことが、胸にグサリときたからです。

私は三十歳まで独身で、約九年間地元新聞社で記者をしていました。私が記者になった当時はまだ女性記者は「お嬢さん」扱いで（今でもその状況はあまり変わりませんが）、普通の女子大生だった私の中にも、自然に「男女同権」の思いが芽生えてきました。もちろん、芦谷さんたち女性解放を叫ぶ女たちに出会ったことも、大きく影響しました。

自分の親を見て、結婚って女にとってずいぶんリスクが大きいものだということがわかっていたので、結婚への憧れはさほどありませんでした。幸か不幸か相手にも恵まれず、しかしそう焦りもせず、三十前まで生きてしまったのです。ところが何を血迷ったか、甘い言葉にコロッとほだされ、つきあっているうちからいたれり尽くせりの姉さん女房ぶり。彼が転職になったため、一年後に私が会社を辞めて、押し掛け的に結婚してしまったわけです。

結婚直前まで、「家事分担も夫婦別姓も二人なら可能だ」と信じていたのです。両方の家から独立した結婚であるため、私は結納ももらいませんでした。

ところが実態は……。言うは易し、行は難しでした。ふたを開けてみたら、私も彼もごくごく普通の女と男。法律婚を対象とした手当てや保障がほしかったし、親や周囲を説得するだけの確固たるポリシーも持っていなかったのです。だから普通に入籍して、九八％の女性がそうしたように私が夫の姓に改姓しました。

こうなると、もう鳥取のような田舎では『家制度』から逃れられなくなります。ましてや夫は長男です。夫の親は、同居を前提とした「嫁」という目で私を見、子どもが産まれれば「うちの跡継ぎ」ととらえる（これがまた男子だったから余計にホクホク顔）。結婚前、私にとって彼は「〇×B男」という男であり、〇×家の長男だろうと次男だろうと、そんなことさほど気に留めなかったのですが、とんだ落とし穴でした。

「通姓別姓」にしても、九年間仕事を通じて自分の人脈を広げてきた鳥取にそのまま住むのであれば少しは楽にできたかもしれませんが、見ず知らずの人ばかりの夫の赴任地では、私は「〇×さんの奥

さん」でいるしかありませんでした。どこの馬の骨ともわからない「『小倉』という女」でいるより「S会社の『O×』の妻」でいたほうが、周囲から受け入れてもらえたのです。無職の私にとって、夫の姓は社会的後ろだて、もしくは所属場所を示すものでもあったのです。

それに第一、「別姓」なんて概念全くない人の実に多いこと！　今までどおりの習慣で私のことを「小倉さん」と呼ぶ人はいるが、「別姓」を理解して呼んでくれる人はごく少数。年輩の人ならともかく、「あなたってエゴイストね。女は結婚すれば男の人生に自分を重ねるべきじゃないの」と私をいさめようとした同じ年の女友達さえいて、結婚観の隔たりにショックを受けました。しかし彼女のような考え方が一般的なのですね。新聞記者時代知り合った、別姓だの女性解放だのと言っている人たちは、世の中のほんのひと握りなんだってことが、身に沁みてわかりました。

「家事」に関しては、私のほうが圧倒的に長い時間家にいるわけだから、必然的に私がやるようになります。実際、夜の九時や十時に仕事を終えて帰ってくる夫に、「晩ごはん作って」とは言えませんが、「会社が悪い」「日本の労働時間が長すぎる」と批判してみたところで、当の本人にはどうしようもありません。それに、記者時代は文字にするだけだった「地球にやさしい生活」とか「いのちを考えた食」というものも実践してみたかったので、こまごまと家事することはむしろ楽しくさえあったのです。

パートナーを得られた安らぎ、子どもを持った喜びは、かけがえのないものです。それを世間一般に認めてもらうこと（つまり法律婚をすること）による安心感も、私には必要だったので。結局、この一年と二か月の結婚生活で見えてきたものは、女の立場の弱さと、そして私自身の弱さでした。しかし、だからといって自分の選択を悔やみ、暗くなってしまうても、何の発展もない。今は今で、独身時代とは違ったしあわせがあるわけだから、それを素直に認めながら、夫と子どもと素敵に「共生」できるような家庭を作っていこう。何年か後、夫に依存し、子どもに癒着しているしかない自分の姿だけは見たくないから。一個の人間としての私をサビつかせたくはないから――。

# AGORAへ愛をこめてエールを送る

 小谷省吾

私は、女性も男性もひとりひとりの人間として考えたとき対等であるという一見健全そうで正しく思われる考えを持ち、社会的、政治的な問題に対処する場面において、できる限り同じ人間としての個人の立場で論じ合い、意味づけようと努めてきたつもりであった。それが対等ということであるだろうと思つたし、私の中の差別意識に対する有効な対抗手段であり、是正方法だと考えてきた。

だが、どうもそれだけでは私自身の中の社会を評価する視点にもろさがあるように意識され続けていた。

女性との議論や対話の中で自分の意見と違った時、どこかで「相手は女性だから」という想いが頭をかすめなかっただろうか。自分と違う視点で社会のあり様を分析された時、「それは女性から見た場合であり、男性の私から考えれば」と考えなかっただろうか。その想いを全部否定するわけではないが、その意見や視点の違いを個人の意見の違いは認めた上で、ではなぜ違う見方になるのかという問いかけを深く自分に見てみただろうか。それらは対等の立場にいる人間どうしが対等の土俵の上に立って交わしている議論での意見の相違ではなく、すでに出発点から構造的な歪みや社会的に差別、序列化されている不平等な立場から表明されたこの社会に対する問いだしではなかったのか。そしてそこには、一見健全そうな理念を持っていると思つている私自身も含まれているのではないのか。「女性の視点から」とか「女性差別」、「女性の地位」という言葉に出会うたびに、社会に対する私



の価値判断の中で何か見落としている大切な視点があるようなもどかしさを感じていた。

私たちが「あたりまえ」だと思っている事が別の人たちからはそうではないのだと異議を申し立てられ、その「あたりまえ」だとしている事それ自身がその人たちを苦しめ、傷つけているという事実には私たちは気づかされることがある。それと同じように、我々男性の側が「あたりまえ」「普通」としている事柄に検討を加えないことにより、この社会で女性の側を苦しめ、辱める構造を強化しているのだとしたら、それは「知らなかった」ですまされる問題ではないのだと思う。知る機会はあるのだ。それに耳を塞いでいることは、加害者に加担することと同義だと言える。

社会に対する女性たちの「NO」の声は、私自身の視点を問い直すものであり、私の価値判断に向けられたものであった。

これまで私は、今の社会に納得のいかない、批判的な視点を手にしていると思っていた。そして、そんな社会には操られたくないと思っていた。ところが大きなところでまんまとその罠にはまっていたのではないだろうか。女性の視点からの「NO」の声にはいろいろと気づかされる点がある。

社会のあり様に対処し、自分の価値判断の理論体系を組み立てていこうとする時に、自分を見つめる作業は必ず必要となるのだが、その時ここから先は個人的な価値観であるとか、生来的な傾向であるという事で深く検討することなく、ないがしろにしてきた部分のいかに多くが、実はそう思い込まされていたものであり、そのように教育されてきたものであるかということがだんだんわかっていく。そして、検討することを意識的に避けていることによって、どんなに不自由な想いをしているのかもわかるようになる。

戸籍の問題、性別役割分担、メディアの姿勢と影響、教科書や教育の傾向、労働現場での差別……食べ物と環境のことでも、現在ここまでそれに対するさまざまな意識が生活の中にまでも浸透して、息長く、そしてますます重大な緊急の問題として取り上げられてきているのも、その「NO」の声の

力が大きく影響しているのではないのか。我々男性の側は最も肝要なところに手を加えないで、声高に体制批判をしていたのではないのか。そして、結局はその体制を支える社会構造を強化していたのではなかったのか。自分の生活に正面から検討を加えることなく、この社会に守られる保身の態度をおのずと身につけていたのではなかったのか。

私自身の全くの個人的な問題だとして自分のうちに閉じ込めていたさまざまな価値基準、判断規範がこれまでになかった自由さをもって検討対象となり、再び社会を見つめ直す際に新たな視点を獲得して、ひと回りもふた回りものびやかで強くしなやかな態度で組み立てられていく予感がする。

一度知ってしまったものは打ち消すことができないように、再検討された視点は、社会をとらえ判断する時に有効な力となるだろう。ここにおいても「検証する」ということは自己の生き方を見つめていく上での必要な手段となるのである。

## 久里浜より発信



山本真澄

久里浜へ来て一か月がたちました。雨に濡れる紫陽花の花の色が目に見え鮮やかです。

ここへ来てゆったりとした時間をもってみて、ずいぶんいろいろなことが見えてきたように感じています。

まず、なんてたくさんさんの自由時間があることでしょう！ もちろん、家事に取られる時間がほとんどないということですが、仕事、仕事と追いまわられることがないということは、なんとゆとりの

あることだろうと改めて感じています。

ここへ来て最初の頃は、みんなが「帰ったらこんな優雅な生活はできないんだから、しっかり楽しもう」が合言葉でした。信じられないくらいゆとりのある生活にとびこんでみて、ただただ夢中で過ごしてしまいました。

でも、なんだかおかしいんです。確かに、仕事をもって働いているということは忙しいには違いないのですが、自分の好きなこともやりたいことも我慢している暮らしなんて、やっぱりどこかおかしいんじゃないか？と感じ始めています。

特に、教師の仕事って、ゆとりがなければ、子どもを見つめる目がくもってしまいそうです。一人ひとりの子どもを大切にすることもできません。できれば、鳥取に帰ってからも、ゆとりある学校生活を生み出せるよう考えていきたいなあと思っています。

家事労働のこと、もちろん、男性を甘やかしていいわけはありませんが、男の先生たちの話を聞いて思うことは、彼らも余裕がない生活をしていて過労死寸前。とてもものに心豊かな家庭生活なんて考えられない状況のようです。そこで、家事労働の分担を提案しても難しい問題が横たわっているようです。個人的な問題としてだけでなく、外側からも考えていかなくは解決への道につながらないことを実感しています。

学校も企業になりはてしてしまうなんてとても残念なことです。子どもたちが育つ場である学校が、もっと豊かに学べる場になればと痛感しています。

今、感じていることは、頭で考えたり本で読んだりして、わかっているつもりだったことが、やはり、経験してみなければ本当にはわかっていかなかったんだなあと思います。

そのことがわかっただけでも、ここへ来てよかったと思っています。あと残り一か月を悔いなく過ごしたいものです。

映画もみて、ワープロも勉強して、本もいっぱい読んで…。

# へあぐらゝとわたし



芦谷美鈴

今から十年前、突然、前田享子がへあぐらゝをひっさげて鳥取地方に現れた。鳥取地方の人々とはとにかく驚いたみたい（とくに男）。

それまで元気印だけで生きてきた私は、へあぐらゝの出現によって、今までボヤーンと「おかしいなあ」と思っていたことが言語化され、理論づけされた。

最初は女が自分のための時間を作るということを大切にして会合をした。夫や子どもの親という立場でなく、自分のための学習の時間——ということで、その頃は子どもも男も会合に入れなかった。女たちだけで密やかにコツコツと勉強をした。

力をつけた女たちはたとえばどうかというところ……家事労働分担の話し合い、何年がかりかで男たちが自然に台所に立つようになった。男たちが子どもに絵本のよみきかせを始めた。以前は外で解放運動や労働運動やってる人が、家の中では平気で「おい、お茶」といばっていたのに、今ではそんな古いことをやる人はいなくなった。本音と建前を使い分けるようなことはできないほどの距離の近いところに仲間がいて、しょっちゅう家に入出入りするのが大きかったみたい。それに男の人たちもみんなで始めたから、結構喜んでやったような気がする。「ストレス解消に鍋を磨くといい」とか、「尻の軽い男って素敵、はいビール持ってきて」なあゝんて。

今のへあこらゝは、部落解放運動やアムネスティ、あるいは仕事や家庭のことをとりとめもなくみんなで話す会。とりとめもなく話しているが、問題は差別、教育、政治、食……と本当に奥が深い。

私に関して言えば、へあこらゝに出会えて、楽チンだった。苦手な家事労働は誰かが一緒にやってくれるし、男の人たちは私のわがままを受け入れてくれるし、ずいぶん得しちゃった。セックスについてもいろいろ考えさせられた。「これって差別の体位？」なあゝんて、その気持ちのいい私をなんとしよう……。いつとき本当に男の人をやっつけることばかり……。よその男をいじめて喜んでいた。いじめられて喜ぶ男の人もこれがいるんだよねえ。女の人は自分が言えないことを私が言って自分の亭主をやっつけるのをこれまた喜んで……。屈折していた時代があったもんだ。紙面を借りて被害にあった男の人たちにお詫び致します。

十七年間やっている塾の仕事で「らくだ式」との出会いがあり「らくだ式」の関係者の方々と「自分と遠いものと出会うには、どうしたらいいか」とか「らくだ式」の子どもたちの対応を学んでいくうちに、対立する世界ではなくて、違いを認めることの大切さを学んだ。大好きなケンカをやめ、男に食いつくことをやめ、仲良くしながらお互いを認め合うことを今、努力中。「ケンカっ早い美鈴さんも素敵だったわ」とは思うけれど、世界平和実現は、違いを認め合うことしかないと思う。違う文化、違う歴史……。そのことに気づいてから、ずいぶん楽チン。相手を攻撃しなくていいんだもの。しかし同調する必要はない。「私はこう思う」と意見を言うだけでいい。差別問題や平和活動をやりながら、差別問題をわかっていない人を差別し、運動は平和的でなく、相手を攻撃することばかりだった自分が恥ずかしい。自分は正しいと信じて疑わない私がそこにはいた。自分は正しいから、自分のようにしない、できない人を批判した。一人ひとりが違う、それぞれのやり方があるなんて言いながら、本当になんということでしょう。自分を押しつけ、相手をなんとかしようとおせっかいばかり……。

へらくだ」に出会ってから、私の中の女の問題も変わった。私は女たちを差別していたのだと気づいた。女を対等だと思っていなかったから、女には怒らず、「その人が悪いのじゃなく女の歴史がそうさせているのよねえ」と女に優しくかった。私は、実は女を相手にしていなかっただけじゃないか……。

女たちが悩みを抱えて訪れる。——今の私は「これは私の問題じゃない」とはつきり頭において、「あなたの代わりにこの問題を処理することはできない」という。私は問題処理係じゃない、私は長年本当にこのことを間違えていた。今の私は問題を抱えている女の人たちに「なぜそうなったの?」「あなたはもうしたいのか?」「あなたは何かができるのか?」「それってどういうこと?」とよく尋ねている。本当にどうしたいのか、どう生きたいのか、興味がある。人々がこれからどう生きたいのかを聞きたい。初めて女の人たちに興味を抱いたのかもしれない。

男好きの私が男を敵に回して闘うのは本当に無理があった。私は女性解放を本当にわかっていなかった。世の中に女と男しかないのだから、仲良くするための解放なのに、仲良くするためにケンカばかりしてきたのね。

世界平和実現のためには、自分がどう思うか言うしかない。そして自分と違う何をどこまで認めることができるかにかかっていると思う。自分探しの旅……自分は一体何を望み、本当に何がしたいのか……それには今の自分を知るしかない。駄目なままの自分、できない自分を認めることができた時、きっと何かが見える。

選挙に落ちたのも、何か失敗したのも、みんな私に原因があったのだとよくわかる。本当に全ての力を出して、落ち込むことを恐れずにやれば、何だってできる。実現不可能なことは何もない。不可能な時は、力を出し切っていないだけ……。私の問題なのです。どんな自分も認めるしかない、それが自分なのだから……。自分がどうするのが世の中がどうなっていくのかと繋がっていると思う。「押しつけない・命令しない・強制しない」でやるしかない。

# 日本の外から見たへあごろく



服部淳子

私は昨年、二回の出張を経て九月から今年三月までの半年間、そして六月の一月間をアメリカ合衆国で過ごした。現在勤務する会社の現地子会社（工場）が、昨秋より操業を開始するに臨んでの、生産立ち上げと現地社員の教育が派遣の目的である。（話題がのっけから非常に私的だが、ここでは自分の体験を今一度追体験する意味で、書いてみたい）。

日米貿易摩擦に、GMの七千人解雇を火種にさらにエスカレートし、アメリカの雑誌がこれを「WAR」と書き立てた。CMでも、年々劇的に増加する失業者数を輸入製品の過剰消費を原因とし、国内製品を誇りをもって買うよう強く呼びかけている。

私の滞在した場所は、デトロイトの西南に位置する人口三千人の閑静な村。ここで日本企業で働くアメリカ人たちと日本人男性社員と共に働きながら、生活をした。

短期間ではあるが、アメリカでの生活で最も強く感じたことは、自分の人生を自分の色で楽しむことを享受しようとする生活観―職業観であり、これに強く惹かれたとき見えてきたのは、男女の平等（特に男の女に対する見方）の、日本のそれとのあまりに大きなギャップであった。日本では、女性にとって選択の幅があまりにも狭く限られていて、自分の望む生き方の実現―自己実現するために、実に多くの障害を越えねばならない。女性は現社会のシステムから、不利な立場、不当な価値を押しつけられていて、この面で日本は、アメリカに比べ確実に何十年も遅れていることを改めて痛切に実

感じた。帰国の日が決まった時、私は母国に帰る喜びというより、ほとんど牢獄に送り返される囚人の境地に近かった。今まで職場で、家庭で、地域で、生きていくために男性優位の環境を受け容れざるを得なかったし、それを無意識的な部分に吞み込んで、不条理さに対し思考を麻痺させてきたように思う。私ははじめ日本の外でこのことを痛感するようになろうとは、深く予想していなかった。が、特に先月海外に出るのは初めての男性社員たちとチームになり出張した時は、日本人男性たちの女性に対する、アメリカ人から見ても非常に不可解な扱い方が、彼らの目を通して大きくクローズ・アップされた形になった。たとえば、当初六人分の食事と買い物を私に期待し、依頼したこと、一方、週末には男たちだけで日本料理店で食事していたことや、現地の女性リーダー（機械エンジニアの肩書を持つ）に、日本でのやり方同様、機械の詳細は知る必要なしとの意向を示したこと等々。いわば日本社会の縮図の顕現。

アメリカも現在に至るまでには、もちろん女性蔑視に抗し実力で闘い抜いた女性たちの存在がある。しかし、この時代遅れさよ。日本の明日を思う時、私は自己から社会へのしなやかな闘いの場所としての「へあこら」に望みの光を見出す。

### 172号「夫殺し」に温情の執行猶予

172号『いのちを見守る』の「夫殺し事件」は、高齢化社会の介護に対して大きな問いを投げかけました。七月十日、名古屋地裁で「懲役三年、執行猶予三年」（求刑懲役四年）の温情判決が下りました。松永真明判事は、「息子たちに相談せずに犯行に至るなど、刑事責任は軽くはないが、献身的に介護してきたこと、夫が生きている限り誰かが介護しなければならぬ状況にあったのに、二人の子ども以外、援助の手をさし伸べる者がなく犯行に至った経緯をみると、被告一人を責めるのは酷」と理由を述べました。172号執筆者の一人、岡久美子さんは「同じ事件を繰り返さないために、精神的ケアを含めた在宅看護サービスを充実させなくては。迷惑をかけてすみません」と小さく生きるのではなく、憲法に明記された「健康で文化的な生活をすべて国民が営む権利」が保証されるようにしたい」と、感想を語っています。



# こわいこわい

近藤亜矢子

参院選が近い。女性候補者を共同で取材する機会があった。「立候補を決めた時にご主人はどうおっしゃいましたか」。導入部あたりで出る質問がこれ。私なんかノートに「出馬の時の夫のセリフ」なんて聞き忘れないようにメモ書きしている。「普段から夫は自由にさせてくれてますから」「体には気をつけると言われました」。答えを聞きながら、いつのまにか質問の必須項目になっているな、と思う。そういえば男性候補者の時は「奥さんは」という質問はしなかった。何の気なしに質問をこなしている自分を見て、こわいこわい、と思う。

「障害者」が入所している施設へ取材しに行くと、「写真撮ってもいいですか」と施設の管理人に聞きそうになる。写真に写るのは、目の前の車イスの青年なのに、だ。そんな話をするに「僕なんか、知らん間に新聞に出たことあるわ」と車イスのオニイサンが笑う。施設の管理者が適当にみつくりて記者を案内したという。「そら、のせられたんや」。他の障害者が笑う。

写真のポーズは後ろ姿だけ、とか、横顔だけ、とか言われたのが染みついて「新聞に載るの」とキヤッキヤはしゃいでいる寝たきり女性の横顔ばかり写して帰ったことがある。

最近の「こわいこわい」は学校だった。校舎の完成式の取材に行ったのだが、全校生徒が来賓あいさつになるといきなり体育館の床にベッタリ正座する。で、お辞儀をするとうしても「平伏」に見えてしまう。思わず写真に撮ったけれど、まだ書かずにいる。

「おはようございます」「ありがとうございます」。運動部の取材に行つてこわいのはあいさつ攻め。円陣を組んで機械のように頭を下げる生徒と、鷹揚にそれを受け流す先生を見ると、なんだか背筋が寒くなる。

こわいこわい。いかんいかん。帰りの車の中でブルブル顔を振っても活字になったものは帰らない。いいかげん、こわいこわい、で済ますのはやめようと思っている。

母性が次世代育成力へ

原 ひろ子

新 曜 社

先日、高校三年生の娘から聞かれました。「おかあさん、おなかの中で赤ちゃんが育つてくると、ホルモンが分泌して母性が育つてくるって保健の授業で聞いたけど、そうなの?」と。

「そうね。おなかの中で赤ちゃんが動く、いとおしい気持ちには生まれるけど、それが母性かしら……。私の場合にはむしろ育てている過程で母性が育つたように思うけど」と答えたのでした。

女性の生き方が一見多様になってきたように見える現在でも、子どもに対してひどいことをした母親が「母性欠如、なんと残酷な母」などと新聞で書かれるように、まだまだ母性信仰は強く、母性のある母親が子どもを育てるべきだ

という意見は強いように見受けれます。

この本では、歴史的見地から検証して母性をどうみるか、生殖技術と母性の関係はどうなっていくのか、子どもを生む・生まないの女性の自己決定権と国家の生むことへの介入等々について、事実を丹念に追ひ、その上で数人の執筆者が各自の見解を述べています。

そして、最近父親の育児への参加が言われるが、母親の育児責任を第一義的なものとする母性強調の風潮のもとで、母親は育児能力を強化させ、父親は補助的存在のままであるなら、子どもの成長とともに、自らも試行錯誤を繰り返しながら成熟していく過程に、父親は十分かわっていないという点で、これまでと本質的に変わりが無い、と言っています。

編者の原さんは「種としてのヒトが各社会単位ないしは、種全体として次世代を育てていく能力をどのように確保していくか考えていきたい」と言い、さらに「次世代育成力」という言葉には親が子どもを育てるといふ家族の絆を包含するのみでなく、家族を越えた人と人との絆のなかで子どもが育つという現象も含まれ、クラブ活動などで、三年生から一、二年生に運営のノウハウを伝えることまでも含ま

れる」というような新しい考え方を示しています。

セルフラーニング研究所ではこれまで、「押しつけない・強制しない・命令しない」指導をどう伝えるかということをやってきましたが、これはとりもなおさず、指導者の次世代をどう育成するかということにはかなりません。そんなわけで、この本を非常に興味深く読みました。

(四六判 368ページ 2884円) (間瀬中子)

らくだ式学習法

間瀬中子著  
日本評論社

〈行動する女たちの会〉の事務局で働いていた著者が、三年前からセルフラーニング（自分からすすんでやる）方式による学習塾「らくだ」のスタッフとして働いている。その「らくだ」で指導者と子どもたちとの会話から感じた著者自身の疑問や不思議を探っていったら、一冊の本になりました……という感じの本。

子どもへの教育だけにとどまらず、女の生き方、女の可能性の開かれ方、女性解放に示唆するものもあると思う。

「押しつけない・命令しない・強制しない指導法とは何か」「違うものと出会うって何?」「世界平和」「人権」等を考える時のエッセンスがふんだんに折り込まれている。

(四六判 224ページ 1545円) (芦谷美鈴)

日本に住むと日本のくらし

佐野 えんね著  
樹心社

著者は、五十年以上も日本でくらしただイツ人。「その長い日本ぐらしの中で、生国ドイツの目、感性豊かな女性の目が、異国日本の、日本人の、日本文化の素のままの真相を、あたたく、鋭く、生き生きと見据えとらえた異色の書!!」と、帯の言うとおり、意表を突く切り口で、あざやかに我々自身の気づいていない日本人の良さを示してくれたり、仏教や茶道、日本の神々についての深い洞察を示してくれる。いずれも、日常の具体例や事象からのやさしい語り口ながら、一つ一つ心にしみこむような味わいを与えられる。

実例を挙げるとキリがないほどで、私は一冊まっ黒に線を引いてしまった。高校の現国の教科書に採用が決まったとの連絡が入った由、うなづける。(実はこの本の発行元、樹心社の亀岡夫妻は大学の同期で、上京の折はフラッと泊めてもらったりしている。実に素敵なカップルで、175号の数少ない男性ライターとして早くからの絞っていたのだが、「それを書くなら僕はミスクラストです」とか言いながら、しっこく食い下がる私から軽やかに体をかわされた。)

一つだけ例を引く。ゆかたを初めて作ってもらった時の話。「あんなのんきな寸法の採り方をして、仮縫いもしないのだから、長さがまちがうのは当たり前」と、胸の中で怒りながら直してもらいに行ったえんねさん。「着せてもらう」といい気持ちでした。そしてわかってきました。体に着る物を合わせることは、向こうでは仕立てやの責任です。それで、細かく寸法を採って、何回も何回も仮縫いをして、ちゃんと体に合わせます。こちらでは、体に合わせることは、一度いちど着ることです。自分の仕事です。心が落ち着いてないと、うまく着られません。それで、着物というものは、なんというか、とても人間らしい、教育に似たも

のだと思ったのです」

私が吹き出してしまったのは、「今からみると、私はまだすっかりドイツ人で、何か自分にわからないこと、おかしいと思うことにあうと、すぐに向こうがまちがっている、と思い込んでしまつて、自分のまちがいには氣をつけませんでした」の所。やんわり論ざれている氣分にもなった。

「なにか変わった、ふしぎな国、けれど、ドイツとはまるで反対のことのある国、私たちドイツ人に足りない点、私にはあるらしい、という氣がして、私は、日本へまいりました」と言う著者は、その時数え年の三十三歳。「日本に来て、一度生まれなおして、一度無になつて、あらためて人間になる道を歩いてみたい」という気持ちだった。そういうえんねさんにして、さらにそれから五十余年の、郷に入つては郷に従ふのくらしをしてきて、「一人の人間の中に、生まれ育つた国の氣候や風土、民族のたどってきた遙かな歴史の経過などが、どんなに根強く働きつづけ、どんなに深い痕を刻みつけているか」をようやく悟らされているということです。

民族や国家や文化の壁を越えることが、どれほど難しい

ことか。お題目の国際化ではすまされないのですぞ、おの  
おの方!!

(249ページ 1648円)

(奥川 睦)

東京バラダイス

早坂 暁著

新潮社

単純に読んで楽しい娯楽編。ただしこの人の芯は、筋金  
入りのヒューマニスト。フェミニストの要素も大いにある  
と私は思う。山田洋二監督で映画化された『ダウンタウン  
・ヒーローズ』の続編。

旧制松山高등학교の寮でかくまっていた道後温泉の娼婦  
イチコさんと九州へ落ちのびた主人公。突然姿を消してし  
まった彼女を追って、東京へ。風の便りに聞く、浅草界隈  
のストリップ劇場などを相彫り(あいぼり)をした刺青を  
たよりに探し歩くが、出会えず、やっと会えた時は、病院  
のベッドの上で虫の息。その冷たくなってゆくイチチを抱  
きしめるところでジ・エンド。

その間、食堂で永井荷風に会ったり、神近市子の赤線廃

止の手伝いをしたり、面白いエピソードがふんだんに盛  
り込まれている。『花へんろ』や『夢千代日記』など、テ  
レビドラマで示した手腕は、小説手法にも、みごとに生か  
されていて、向田邦子を思い出してしまふ。郷土の出身だ  
からと、身びいきで言うのではない。

あら筋で言えば、主人公の将来のお荷物になってはと、  
身を引いた女性を捜す青年の純情物語なのだが、時代背景  
や遊廓の風俗、そこに生きる人びとの人情の機微や哀しみ  
がこまやかに描かれていて、通俗を扱いながら通俗に墮し  
ていない。

涙は、ソルト・リッチH<sub>2</sub>Oだという化学教師の吐く言  
葉なども、ストーリーの中に織り込まれていておかしい。

「涙は、単に塩けのする水にすぎない」そう思って人生  
を生きる人間は、人にだまされることはない」「が、だま  
されないぶんだけ、損をする」ギリシャ哲学者、ジュケロ  
著『エーゲ海逍遙』の中の言葉として紹介されたが、調べ  
てみるとそんな哲学者も、そんなタイトルの本もないとわ  
かり、キケロをもじって生徒をからかってみただけだろう  
と得心したりする。スツとぼけたのどかさも良い。

(389ページ 1600円)

(奥川 睦)

心にひびく映画

——興行の世界に創造を——

高野悦子著

岩波ブックレット No. 138

岩波ホール支配人として知られる高野さんのご本にはいつもフェミニズムの精神があふれている。平和・平等・公正への熱い想い——。

女性は無理とされた映画監督を目指してパリのイデック（高等映画学院）に学び、首席で卒業しながら、ついに日本ではその職業に就けず、女興行師として創造者の苦しみに身を削りながら、数々の不可能を可能に変えていく過程は、読み始めると一気に読了せずにはいられないほど興味深い。

新しい道を切り拓いた筆者は、今は「持続」を問われる段階になり、「持続には創造の精神が必要」という先輩のことばを胸に刻む。そしてまた女の先輩たちに若い時から言われ続けてきた「女性の仕事は六十歳から」を生かそうと、六十にして日本舞踊を始める。みずみずしい映画人生

四十年は、日本の戦後史四十年でもある。

（A5判62ページ 310円）

（斎藤千代）

わたしとあなた

愛って性ってなんだろう

ウッラ・アンデション

ビルギッタ・エークルンド共著

大井清吉監修・直井京子訳

社会評論社

性教育は生教育——自分が人間としてどう生きるか——  
ことを生身をとおして教えること——。そう考えるとき、この私という生——性を豊かに生きていきたいと思う。豊かに生きるためには、性生活において自分たちが主体となり、たくさんの選択肢から自分の意思と自覚により選び取っている積極的姿勢と主体性——生きる能力——を社会集団の中で養っていくプロセスが必要だ。それはつまるところ、「自分を愛する心」をいかに獲得し、いかに育むかに繋がっている。ここでいう自分を愛する心は、うぬぼれ、エゴなどとはニュアンスが異なる。自分を愛することができる

から、他人を本当に愛することができる。そして世界も知ることができる。つまり「わたしとあなた」であり、そんな視点に立った「愛って性ってなんだろう」なのである。

本書はスウェーデンのちえおくれ（この言葉、別の表し方がほしい）の人たちのグループ性教育における教材として、最も多く読まれている本のひとつ。「ちえおくれの人身がでできるかぎり理解し、考え、判断し、決定すること、自分の決定に責任が持てるようになることを、非常に大切にしている」一点に特色があると説明が添えられている。最近、日本で、ラジオの心身ハンディキャップの人たちの特集番組で、施設の中の性について、実際にそこで生活している人たちの声を取材するなどの動きが出てきた。本音の性教育が求められている。そんな意味でも、本書は国内初の試みであり、よい原型となるものと思う。

〈あこら鳥取〉の芦谷美鈴によると、「テクニクのごとが書かれていないのが欠点」との評であるが、ぜひ一読をおすすめしたい本である。

（菊判96ページ1236円）

（服部淳子）

## 平和憲法を世界に 第1集

平和憲法（前文・第九条）を世界に拡げる会編

影書房刊

日本の平和憲法こそ世界に平和をもたらす一信条に、オハイオ大学名誉教授、チャールズ・オーバービー博士が米国で〈第九条の会〉を発足させた志を受けて、日本でも〈拡げる会〉が発足した。この本は、オーバービー博士の講演記録を中心に、結成準備会「平和憲法と国際貢献」について一のシンポジウム（石田 雄、中島通子、星野安三郎）の記録に加え、伊藤成彦、勝守 寛、土井たか子、大倉八千代、外口玉子、島田信子氏ら、平和運動を続けてきた人々の、平和憲法に寄せる熱い思いを綴ったもの。憲法九条を実質的に骨抜きにしたPKO法案が成立した今、再読、三読したい。

（A5判 110ページ 1030円）

（大原 涼）



武道館を圧した迫力

住井さん九十歳の人間宣言

定刻、八千五百人が広い会場を埋めた。部落解放運動に関わり続けた谷口修太郎さん、『橋のない川』の版元と編集者の話に続き、寿岳章子・福田雅子・野坂昭如・永六輔さんなどの、それぞれ心に滲みるユニークな発言で、住井さんのすばらしい人間性が浮かび上がったあと、住井さんの童話のスライド上映、そしていよいよ真打ち登場。

「武道館に……とは、ほんのイタズラで言つてみたんです」と会場を笑わせて本題に。小学校三年の幸徳秋水事件で、「仇討ちをしよう」と決心したのが『橋のない川』の始まり」と、深く重い心のうちが語られ、満場は水を打ったよう。老荘の哲学、バグウォッツシュ会議と、古今東西に及ぶ博識と、実践に裏打ちされた話に、八千五百人は魂を吸い込まれるように聞き入った。

川

農水省が農村女性をバックアップ

新しい農山漁村の女性二〇〇一年に向けて

縫田曄子さんが総理府・婦人問題企画推進会議の座長に就かれてから、各省庁のマスメディア婦人問題担当者懇談会に『あくら』のようなミティコミも招かれるようになった。

六月末、農水省から會議の案内状。初めての分室がわからず訪ね歩いて行き着いた先は、千鳥ヶ淵沿いの山荘のような小さな建物。美しい庭に面した省議室は、田形會議用のテーブルの一つ一つにスピーカーがつき、環境は最高。

「農村漁村の女性に関する中長期ビジョン懇談会」(女性)



十人、男性八人」の座長、澤邊守氏（農村生活総合研究センター理事長）の概説に続き、懇談会がまとめた報告書の起草委員長、宮崎礼子氏が、七十ページに及ぶ報告書の内容を、明快に、しかも要領よく解説、農漁村女性の深刻な現状がくっきりと浮かび上がった。

現在、農林水産業の就業人口に占める女性の比率は、農業で六割、林業で三割、漁業で二割、とくに農村は女性就業が男性を上回り、「母ちゃん農業」になって久しいのに、農協役員は今もほとんどすべて男性。妻名義の田んぼが一反でも持てると「美談」として語り伝えられる、ほ場作業中のトイレもない等々、都会の女性には想像もできない現状報告に、『あごら』を二十年も出し続けながら、農、漁村女性特集を一度も組まなかったことを、心から申しわけなく思った。

この報告書で特記すべきことは、農漁村女性に対するアフーマティブ・アクション（役員の席を一定の比率で少数者のために用意するなど、優遇措置で差別を解消し、実質的平等を目指す積極的差別是正施策）が明記されたことである。「暫定的な特別措置を含めた各種措置の導入を検討する必要がある」として、農協、漁協、森林組合等の運営に女性の意思が反映できるように、婦人部代表を役員とすることや、役員の枠を拡大して女性が役員になりやすく

する施策を示した。国や地方公共団体の補助事業で「女性農業者」や「農協婦人部会長」を計画策定の委員に含むことを明記することなども加えられた。農業女性就労者は三百四十万二千人、六〇・二％を占めるのに、農協役員は〇・一％。アフーマティブ・アクションの導入については、委員の中でも異論はなかったという。

公私の審議会や、女性にとって非伝統的な職場への女性進出を目指すアフーマティブ・アクションの導入は早くから叫ばれながら、まだ実現していない。この提案が実現し、農漁村女性の地位が向上することは、日本の女性全体の地位向上にも大きな意味を持つ。農村女性が「国策」にからめとられないようにとの警戒も含めて、注目して期待したい。

（千）

### 国の審議会参加はまだ「遙かな道」

#### 総理府婦人問題担当室懇談会

農水省の懇談会より少し早く、総理府婦人問題担当室の懇談会があった。婦人問題企画推進本部では、「西暦二〇〇〇年に向けての新しい国内行動計画（第一次設計）」の推進、中でも国の審議会への女性委員の割合を、五年間に一五％

にすることを新たな目標として努力しているが、平成四年度末（92年三月三十一日）現在における国の審議会への女性委員の参画状況調査結果がまとまったのを機に、国連ビデオの日本語版「道を拓く―世界の女性は今」の完成試写をかねての懇談会であった。

審議会参画状況の調査結果は、なかなか興味深かった。昨年より〇・一ポイント減って九・六%が平均値。外務省の一六%、法務省の一四・三%、厚生省二二・一%がベスト・スリー。ワースト・スリーは自治省二・四%、沖縄開発庁三・三%、総理府五・九%。「紀元二〇〇〇年で一五%」という目標も謙虚なら、そこに至る道もまだ遙かなことを痛感させられた。

知名女性の複数就任は改善され、現在「一人四委員会」は厳守されているとのことだったが、野に隠れた有識者の登用のためには、女性の側からも積極的に名簿を提出するなどの努力も必要だろう。女性の側に、「審議会にからめとられるのは危険」という認識もあるが、このため良心派の参入がますます困難になっていることは考慮してよいことかもしれない。農村女性に対するようなアフアーマティブ・アクションも検討されてよいかと考えさせられた。

（千）

## ILO「家族的責任条約」批准へ向けて

いま、働く女性の七割は主婦。家庭と仕事の両立は、年々環境整備が進んでいるものの、家庭責任は依然として女性の側に重い。男であれ女であれ、家庭責任を負う人が、責任を負わない人と差別されてはならないことを規定した強力な支援者、ILO条約第百五十六号「男女労働者特に家族的責任を有する労働者の機会均等及び均等待遇に関する条約」と、同名の勧告（第百六十五号）の学習会が、日本婦人問題懇談会の主催で、六月二十七日、東京、飯田橋で開かれた。

ILO東京支局次長・藤井紀代子、弁護士・中島通子、〈連合〉女性局長・松本惟子という、この問題についての最高の講師陣とあって、会場は満員。終始熱心にメモをとる人びとで埋められた。

まず藤井さんが、条約と勧告の内容を、明快に解説。世界十八か国が批准、ECではすでに実現している、と、日本の批准の必要性を説いたのに続き、中島さんが、均等法をめぐる「保護と平等」論争を振り返りながら、国際的には「性に基づく保護」はできるだけ小さくなる傾向にあるが、日本のような労働後進国では配慮が必要、と、共生社会の展望を語る。松本さんは、家庭責任を持つ者も持

たない者も、均しい待遇を受けることが、この条約・勧告の眼目、と単身者にも目配りのきいた配慮を強調。「パート減税はやめたい」と、取られるだけで再配分が薄い。日本の単身者、特に単身女性への差別を明らかにした。〈婦問懇〉しい、充実したすばらしい集会で、資料も十分に用意されていたのがありがたかった。なお、詳しい内容は、秋に〈婦問懇〉から刊行される予定。

(田)

### 各政党・会派に政策をきく会

女性の政治参加・政界浄化を軸に活動が続けている日本婦人有権者同盟は、今度の参院選でも、「政策をきく会」を開いた。

各党の政策担当者がそれぞれ耳ざわりの良い政策を披露するなか、質疑はPKOに集中。しかし、自民党・小杉勇氏は、「PR不足、誤解があります。ご理解ください」。公明党・二見伸明氏は、「カンボジアに兵を出すかどうかは、これから決めること。何が何でも出すものではありません」と低姿勢。民社党・安達裕志氏だけは、「審議は尽くしたと考えます」と強硬姿勢。連合参議院の栗森喬氏は、「政治のあり方がPKO以上に重要」と、逃げの姿勢。す

べて予想されたとおりと言えはそれまでだが、毎回、選挙のたびに各党代表と女性団体代表の場を設け、「女性の一票」の重みをアピールする有権者同名の作戦は、さすが市川房枝さんの血と汗を受けついでいる。(七月一日、婦選会館)

(伊)

均等法の改正を実現したい！

大脇雅子さんを励ます会

三年前の参院選にはたくさんさんの〈あこら〉会員が立ち、五人が当選した。今年も多くの方に立候補の誘いがあったようだが、今回会員で立たれたのは大脇さんだけ。突然の立候補、そして突然の集会のご案内だったが、ともかく駆けつけた。

大脇さんは一九八八―九〇年、日弁連の女性の権利委員会の委員長をつとめた人権派弁護士。いまも市民平和訴訟団の弁護団の先頭に立っておられる。専門は労働法。『均等法時代を生きる―働く女性たちへの応援歌』(有斐閣)ほか著書も多い。「まもなく均等法の見直しが行われる。そのとき積極的に立案して、均等法の問題点を改めたい、という一念で、思いきって立候補しました」とのこと。明

せきな論理に立つ大脇さんの提案が国会で成立することを祈ってやまない。社会党・護憲連合／比例区第二位。

(千)

## 壮大なビジョンと巨額予算でスタート

### 東京・ウイメンズ・プラザ説明会

都の方針で進められようとしていた東京の女性会館建設計画に、都民女性たちが異議を申し立て、自選の委員も送り込んで計画を練り直していた東京ウイメンズ・プラザの基本計画がまとまり、六月二十四日、都内各女性グループに対する説明会が開かれた。

一冊千円以上はしたのでは……と思われるB4版カラー二十四ページの豪華なパンフレットを基に、①ひろば②女性情報センター③自己開発センター④ネットワークセンター⑤相談センター⑥女性問題研究センターの六つの機能を盛り込んだ諸施設の説明があり、女性の社会参画の促進、交流と連帯の促進、男女平等文化の創造、を柱に、男女平等社会の実現を目指す、と見事な目標が掲げられれば掲げられるほど、絵に描いた餅の思いが強くなるのは、立地条件の良い飯田橋のセンターを引き払って、交通の便が必ずしも良いとは言えない青山に移転する問題等々を含めて、

利用者の素朴な感覚からかけ離れていった経過が、ノドに刺さった小骨のように、今もつかえているからだろう。

会場からの質問で、ソフトウエアの中心となる新設の女性財団の今年度予算は約六億と発表された。財団の職員については、「七月一日まで公開できない」、人件費は「特定できない」と、何やら不透明な回答。七月一日、理事長は鍛冶千鶴子氏、と新聞に記事がでて、やや安堵したものの、この豪華施設を活かすも殺すも、ソフトウエアと方向性を見守る都民の視線にかかっている。画餅が思いのほかの美味となって重用される日を祈りたい。

新施設に約六億が注がれる一方、飯田橋の情報センターは予算が削減され、たとえばビデオの投影機は故障したまま修理不能、買い換えの予算もないという。新しいセンタ―に一挙に新器材を揃えるのではなく、飯田橋を快適な状態にして、その器材を新施設に運ぶことはできないのだろうか、と、都民としては素朴に思う。

(千)

### 斎藤千代さんのお話とビデオを観て

頭をガンと殴られたようで、しばらく言葉がでなかった。ショックだった。

真黒に焼け焦げた人間の形をした物体は、女性や子どもと思われるものが多かった。

シエルターの中の民間人の変わり果てた姿だった。思わず目を覆いたくなったが、目をそらしてはいけない。これが現実なのだと自分に言い聞かせ、息を詰めて見つめた。広島や長崎の原爆の犠牲者と、全く同じではないか、いやひとつ違う。建物はたったひとつの小さな穴を除いて、ほとんど無傷なのです。

ピンホール爆弾で小さな穴を開け、次にその穴に、生物だけを丸焼きにする新兵器を落とし、外観はそのままに残し、中の人間だけを殺傷するのだそうだ。

私たちは、湾岸戦争中、毎日衛星放送で送られてきた画像を見る限りでは、こんな残虐さは伝わってこなかった。正義の戦争、クリーンな戦争と言われ、多くの人々は、そのとおりだと信じきってだまされていたのだ。

国連軍とか多国籍軍とか、いかにも正義のために戦っているかのように報道されていたから、私たちは、いや世界中の人々はだまされてしまっていた。イラクのあの女性たち、子どもたちになんの罪があったのだろうか。

そして湾岸戦争が終結して一年半たった今も、食糧、ミルク、医薬品の不足によって、いちばん弱い子どもたちから死んでいってるのです。イラクに対する経済制裁という

正義のために。

今、我が国でもPKO法案が成立しようとしています。国連平和維持軍という、この世でいちばん弱い立場の子ども、女性、老人を殺して平和を維持するという悪魔の法案のために、我が子を戦場に行かせるわけにはいきません。ほとんどの国民が他人ごとのような気でいますが、国連平和維持軍などと、名前はかっこいいが、国連軍がイラクでやった現実を知れば、平和のための戦争なんて決してありえません。もっともっと現実を知る努力をし、今の世の中に流されないようにしないと、日本は刻々と軍国主義の国になりつつあるのです。こんな中で真実を一人でも多くの人々に知らすべく、日本中、世界中を駆け回っている斎藤さんの勇気と努力に敬服いたします。お身体にはくれぐれも気をつけてください。（鳥取 内田真由美）

## 湾岸戦争のスライドとビデオを

お目にかけます。

希望者は事務局までご連絡を。

TEL 03 3335 4113 941

FAX 03 3335 4119 014

「あいらを読んで」

◆172号

「夫殺し」というタイトルに驚きましたが、読んでしみじみと考えさせられました。どの原稿も心にひびきましたが、中でもご夫婦で公判を傍聴されたお話は印象的でした。特異な事件として非難するのではなく、それぞれの方が、ご自身の問題として、心の深い部分でとらえておられる。これこそフェミニストの態度だと思いました。「医師による殺人」が起訴されたという報道のなか、この号をもう一度読み直しています。

◆173号

(埼玉 和田みつ子)

「いま輝く女たち」―ステキなタイトルにひかれて購入、正直なところガッカリしました。へあいらへに入会したいという気持ちで手にしたのですが、へあいらへが何を考えている会なのか、さっぱりわかりません。もう少しへあいらへがわかる号がほかにあるのでしたら送ってください。

◆174号

(長野 松本優子)

従軍慰安婦問題は、読めば読むほど、たまらない気持ちになり、とてもショックでした。これほどひどいとは思っ

てもみませんでした。従軍慰安婦は、まるでモノ扱いです。人間として扱われていません。

知らないことは恐ろしいもので、多くの人に知らせなければなりません。マスコミなどで取り上げるのはほんの一時期ですもの。新しいニュースがあれば忘れられます。

私は、この従軍慰安婦のことを知人に話をする、戦後補償となると従軍慰安婦だけでないでしょう。そんなことを一つひとつ取り上げて補償していれば、日本の経済はどうなるの」と言う人もいます。

私は、どんなにお金がかかっても補償すべきだと思う。そして、一度戦争をするとこんなに大きな犠牲を払わなければならぬことを知らせるべきだと思うのです。それでもおろかな人間は、戦争を起こすのですから。

意識を持って社会をみていくと、変だと思ふことが多くありました。自分ができることを少しずつやっていきたいと思っています。情報をよろしく願います。

(名古屋 野村京子)

◆『あいら』174号を十冊お送りくださいませ。この十冊は、同封の「答責会議」のメンバーにさしあけるつもりです。天皇が「無答責」でワルイことをいっばいしてケロ

ッとしている、それはおかしいところから、我々は「答責」に生きてゆくという趣旨で、昨年夏から、韓国の方々と交流しています。今年は、七月十一日から十日に開きます。へあごらの方々にも、およろしければ知らしてください。

(京都 寿岳章子)

◆母は会員。毎号『へあごら』が送られて来て、私もほんの少し目を通します。最新号の「従軍慰安婦」の方の問題について書かれたものを読みました、私には初めて聞くことで、驚き、また気の毒に思いました。女性問題に取り組む皆様の姿勢は立派だと思います。やはり女性は弱い立場なので、あちこちで不当な扱いを受けていますね。

(東京 長尾真由子)

◆慰安婦の方々の証言、元兵士の証言、そしてなまなましい資料……。しばらく口をきく元気ありませんでした。特に高里さんの「追悼の旅を迎えて」には、涙がとまりませんでした。「慰安婦」が、私の心に住みつけかけをつくってくださいたことを感謝しています。

(埼玉 今村和代)

◆学習会の資料に活用しています。いろいろな方のいろいろな視点、そして証言や資料など、資料として役立つものが多いので好評です。

(横浜 池田光子)

#### 【新入会員】

◆高橋ますみ様にいたく刺激されました。何かやりたくてもできない主婦という立場でモヤモヤを胸中に秘めながら六十歳になりました。

へあごらによって何かを掴めるかもしれない……と期待しています。よろしくお願いいたします。(富山 高木栄子)

◆ずいぶん以前から知っていた『へあごら』、やっと講読させてもらうチャンスに出会いました。PTA等に始まり、地域での種々の活動を繰り返すうちに、女性がお互いに足をひっぱりあわず、助け合って、男女共生できるよう、地元根のついた活動のグループ作りをめざしたいと意気込んでいます。(吹田市 中尾敦子)

#### 【署名】

◆署名用紙お送りします。三十三名分です。

P KO法も通って、これから、戦争への第一歩を、どうやって防げるのか、考えてしまいます。『従軍慰安婦』の署名用紙の「国際貢献」という言葉、むしろ、使わないほうがいい、という意見がありました。「人はいつも深く考えているわけではなく、国際貢献」という言葉にダマされて、P KOに賛成の人がいるかと思えば、「国際貢献」↓P KO↓だから反対、という短絡的な人も多い」という

のです。私は短絡的に考えてほしくないと思うものの、身近にも、そういう人が多いのは事実です。

署名は、日本妙法寺のお坊さんが平和行進で来札した時の集まりで多くしてもらいました。(札幌 高橋芳恵)

◆PKOの問題と結びつけて署名をしてもらいました。イラクの経済制裁解除、「慰安婦」問題、どちらもPKOとコインの表裏といった感じですね。(大阪 古田みつ)

◆署名用紙お届けします。広島は独自候補が急に立つことになり、毎日大忙しです。(広島 畠山裕子)

## 編集後記

へあこら鳥取はメンバー十人弱。忙しい会員ばかりでなかなか例会が開けないのが悩みの種。一年ほど前にへあこらのフェミニストを見る会(上村くにこ、小倉千加子、島崎今日子、畑律江)を企画したり、昨年末へ斎藤千代さんのお話を聞く会を開いたり、その他いろんな実行委員会の名で行なうイベントにメンバーの多くが参加。

マスコミ関係者、子どもが不登校になったことがきっかけでへあこらを訪ねたお母さん、教師、アムネスティ等の人権問題関係者、環境問題に関わる人など、顔の中身は厚い。

◆ご活躍、いつも共感をもってみつめております。小さな力で申し訳ありません。署名を送ります。遅かったでしょうか? お身体を大切に、皆様のご活躍、お祈りいたしております。(川崎 袋江敏子)

◆このほか、たくさんのお手紙とたくさんの方の署名をありがとうございました。秋に国会が再開してから提出します。二種類の署名、どちらもPKOと深くかわっています。その趣旨で集めて頂ければ幸いです。(事務局)

街で顔を合わせたら、即へあこら。一人で歩いててもへあこら。歩くへあこらと呼ばれています。

へあこらの月刊誌を担当することで、今までの自分を振り返り、これからどう生きていくのかを考えるきっかけになればと思いました。なぜへあこらなのか、なぜへあこらにこだわり続けるのか、へあこらは私にとってなんなのかを見つめていけたらいい……。

## (筆者紹介)

内田真由美さん 昨年十一月、斎藤千代さんの講演会に来



てくれ、感想文を寄せてくださった。〈あこら〉の会員ではないが、〈あこら〉が企画する会や環境問題で飛び回っている。とっとり元気印の女のひとり。

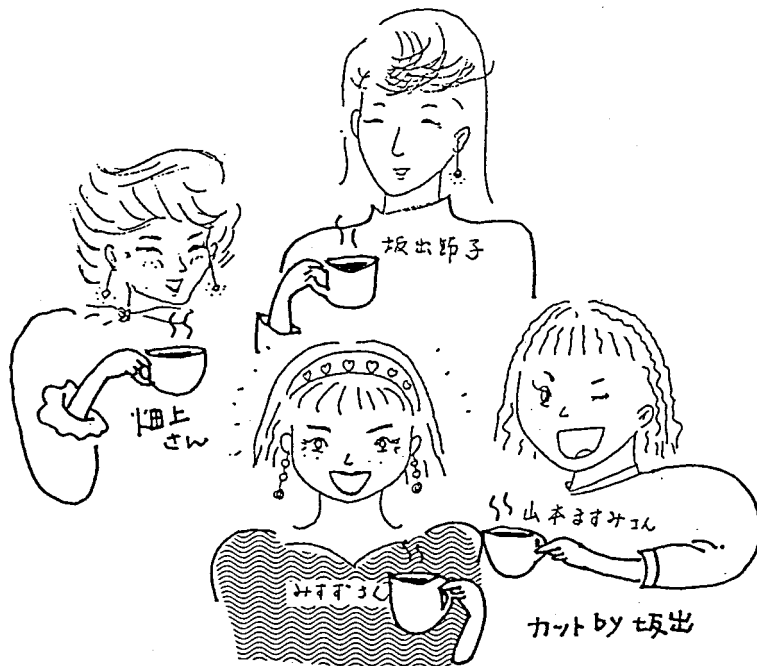
小倉輝子さん あこら会員でしたが、今は境港にお住まいです。

小谷省吾さん 〈あこら〉の会員、アムネスティや人権問題の会等に属し、何でくつてるのかと思うくらい、運動（活動）が主の生活をしている。あこらのメンバー全員の愛人と呼んでいます。

畑上公子さん 〈あこら〉の会員ではないが、塾の手伝いをしていただいているため井戸端会議や座談会の時同席して下さり、テープおこし（坂出さんの分）もしてくださった。

日出嶋香代子さん 〈あこら〉の会員  
無替悦子さん 〈あこら〉会員ではないが、女の立場で解放運動をしています。

山本真澄さん 小学校教師。二か月前から内地留学。留学先から〈あこら〉へ近況報告を送ってくださった。



縫田瞳子さんが鳥取で講演なさったとき、「へあこら鳥取」です」と名乗って前田さんが質問したら、「鳥取にもへあこら」があるのですか」と驚かれたそうです。

85年、ナイロビ会議のあと、へあこらの企画会議を鳥取で開きました。「ナイロビ会議の報告会に、ぜひご参加を！」と、芦谷さんや前田さんは、その一か月前からビラをまき、ご自分の車にポスターを貼りつけて、毎日、デモンストレーション。でも、当日、会場に現れた会員以外の方は、たった一人。会員は三人でした。「鳥取では、婦人問題と言うと、アカと呼ばれる」と、その時、聞きました。それから三年後、芦谷さんの肝入りで、用瀬の青年団の学習会に招かれました。「鳥取市のすぐそば」と思い込んで行った用瀬は、中国山脈の山の中。最近でも時々「熊が出た」と、テレビや新聞で報道される林業の町でした。芦谷さんは、ここで町議選に出（もちろん女の立候補は初めて）、「リブ選挙」で地域を驚嘆させ、「トップ当選」と、各紙に予想が出たおかげで（？）ブービー。落選後の嵐の中で離婚等、さらに厳しい風雨を生き抜かれました。美鈴さんは、以来、いっそう明るく、いっそう大地に足をつけて生きていらっしゃるようにお見受けします。「死んでしまいたい気持ち」を、「死んでたまるか」に切り替えてい

く、こずえさんのスゴさ。さすが、この母にしてこの娘あり。正直に言うとは、私など、途中で、「えっ、まだ妥協しないの……」などと思わず声を出しながら読みましたが、これくらいのエネルギーがなくては、問題の本質が見えてこないですね。

そのほか、「自分を変えた女たち」「問題をのりこえた子どもたち」——日本海からの潮風の数々。暑気も吹っ飛ばす思いです。

●前号巻頭のしま・ようこさんの問いかけは、重い問いかけでした。「フェミニズム」の名で刷り込まれているものも洗い直しながら、「男の論理で綴ったマニュアルのペーじごとにつくさ言わずに、マニュアルなしにその場その場で自分を全開して対応し、結果として男のフロピイをホゴにしまえる力量を貯えたい」ものですね。それを受けているこの号、「ただ、読む」のではなく、「私は、こう読んだ」という感想を、ぜひお寄せください。ハガキ一枚でも……。

●八月は恒例の夏休み。177号（八、九合併号）は、九月に沖縄からの発信です。

●参院選。変わりっこない、と思われていたイスラエルの総選挙のように、アッと驚く結果の出る七月末を夢みたいと思います。

（事務局 斎藤千代）

へあごらは、ギリシャ語で「人と人が出会うひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうひろば。さくのないひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』(年二回刊)を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにほしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。

全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(年額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-3354-3941)へ

あごら 176号 1992年 7月10日 発行

●編集 あごら鳥取

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 くあごら企画会議 定価680円(660円+税20円)

